

41384

教科書文庫

4
8/0
31-1942
2000.0 23622

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

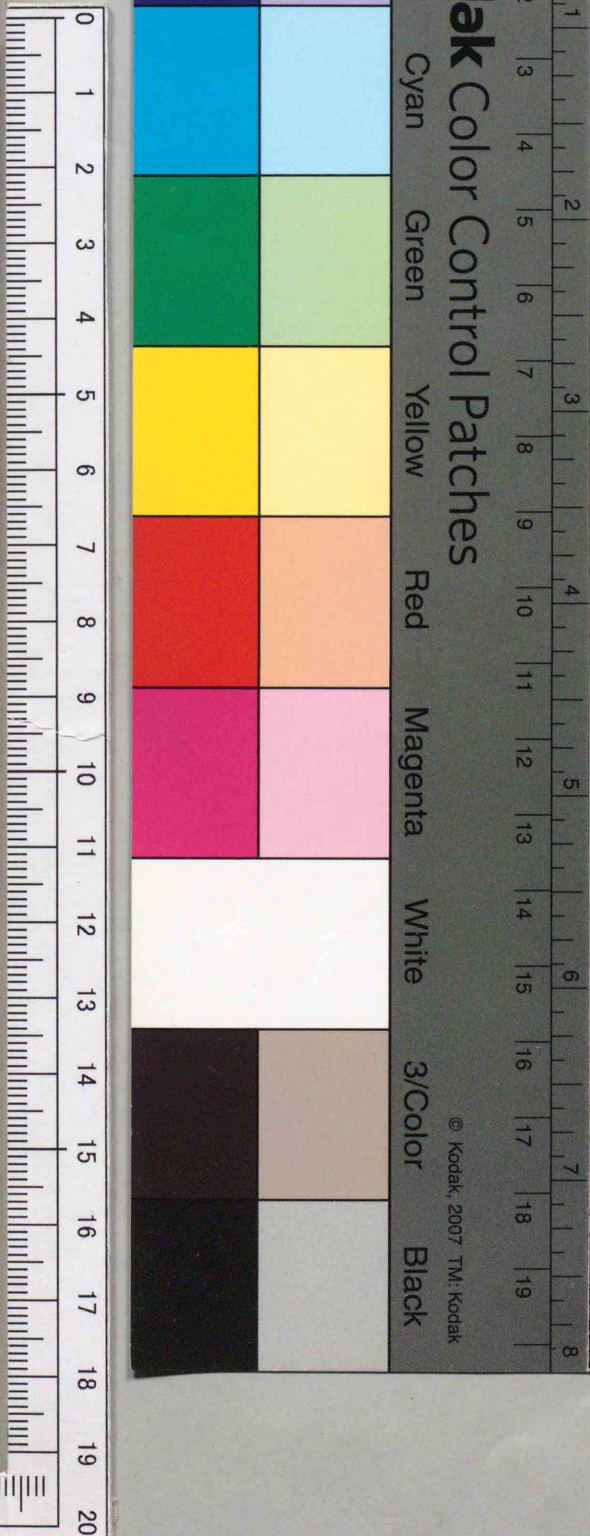


© Kodak, 2007 TM. Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM. Kodak

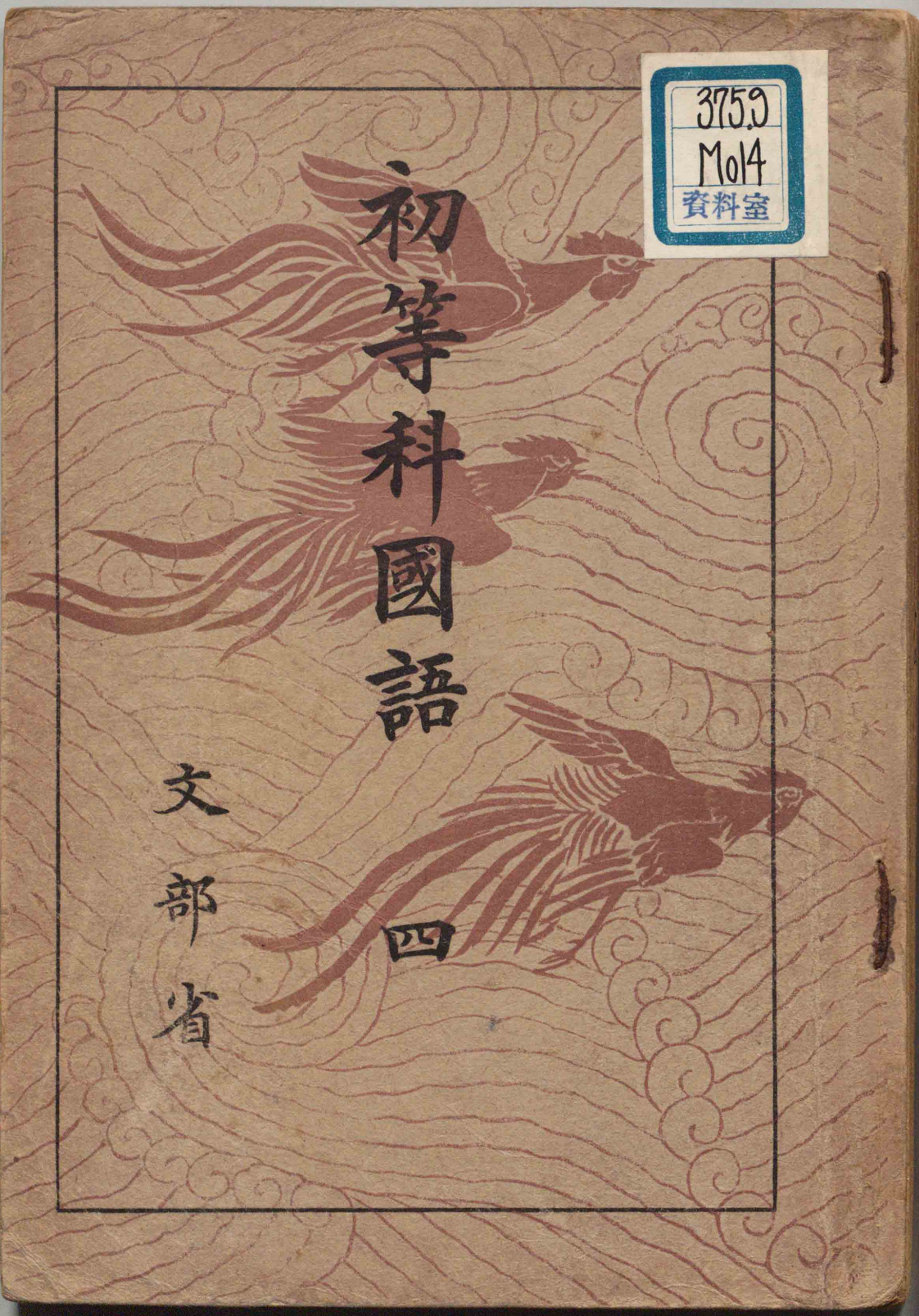


3759  
Mo14  
資料室

初等科國語

文部省

四





資料室

375.7  
M104

初等科國語

四

文  
部  
省



廣島大學圖書印

もくろく

一	船は帆船よ	四
二	燕はどこへ行く	六
三	バナナ	十三
四	大連から	十九
五	観艦式	二十六
六	くりから谷	二十九
七	ひよどり越	三十一
八	萬壽姫	三十四
九	林の中	四十四
十	グライダー「日本號」	四十六
十一	大演習	五十六



十二	小さな傳令使	六十四
十三	川土手	六十八
十四	扇の的	七十一
十五	弓流し	七十四
十六	山のスキー場	七十七
十七	廣瀬中佐	八十六
十八	大阪	八十八
十九	大砲のできるまで	九十六
二十	振子時計	百四
二十一	水族館	百九
二十二	母の日	百十九
二十三	防空監視哨	百二十七
二十四	早春の満洲	百三十一



一 船は帆船よ

船は帆船よ

三本マスト

千里の海も なんのその。

萬里の波に

夕日が落ちて

なほも南へ 氣がはやる。

廣島大學  
圖書印

とまり重ねて

心にかかる

安南・シヤムは まだはるか。

椰子やいの林に

照る月影を

昔の人は どう見たか。

日本町に

ふけ行く夜の



ゆめは故郷を かけまはる。

二 燕つばめはどこへ行く

夏の末ごろ、燕が、電線や物干竿に、五六羽ぐらゐ並んで止つてゐるのを、よく見かけます。時には、十羽二十羽も、ずらりと並んでゐることがあります。その中には、親燕もあゝますが、今年生まれた子燕が、たくさんまじつてゐます。もう大ききだけは、親燕と同じですが、まだ口ばしの下の赤色が、親燕ほどくありません。口ばしの両わきが、いくぶん黄色に見えるのさへあります。

かうして、大勢の燕が並んでゐるのを見ると、何かしら、相談でもしてゐるやうに見えます。まもなく、去つて行かなければならない日本に、なごりを惜しんでゐるのかも知れません。これから行かうとする遠い國のことを、話し合つてゐるのかも知れません。

やがて、九月もなかばを過ぎると、燕は、そろそろ日本を去つて行きます。十月には、續々と去つて行きます。十一月の初めになれば、もうほとんど、その姿を見せなくなつてしまひます。

いつたい、どこへ行くのでせうか。



燕の行く先は、遠い、遠い南の海のかなたです。

東京から、四千キロもあるフィリピンで、ある年の十月の末、子どもが燕をつかまへました。すると、その右の足に、日本の文字を記した、小さな金属の板がついておりました。それによると、埼玉縣のあるところで、試みにしるしをつけて、はなしたものだといふことがわかりました。

しかし、燕はもつともつと、南へ飛んで行くのです。南洋の島々から、中には、さらに海を越えて、遠いオーストラリヤまで行くのがあるといふことです。

燕は、鳥の中でも、いちばん早く飛ぶ鳥です。汽車や自動



車も、かなはなはいくらゐの早さです。から、何百キロの海を、一氣に飛ぶことも、決してふしぎではありません。しかし、その中には、今年生まれの子燕がたくさんあります。また、時にあらしや、そのほかの思ひがけない災難に、あはなないともかぎりません。昭和六年の秋のことでした。ヨーロッパのある國で、約十萬羽の燕が、急に落ちて来たことがあります。その年は氣候が不順で、九月の中ごろ急に



寒くなり、雨が降り續きました。をりから南へ飛行中だった燕は、食にうゑつめたい雨にずぶぬれになつて、もう身動きもできなくなつてしまつたのです。そこで、その國の人は、このつかれはてた鳥を拾ひ集めて、暖い家に入れてやり、食物を與へてやりました。さうして、つかれのなほるのを待つて、南の暖い國へ送つてやりました。何しろ十萬といふ數ですから、これを送るのはたいへんなことでした。九月の末から、十月の初めにかけて、汽車や飛行機で、何回にも送つたといふことです。

昔から、燕は同じ家に歸つて來るといはれてあます。つまり、今年ある家の軒下で巢を作つた燕が、來年また同じ巢へもどつて來るといふのです。近年になつて、いろいろな方法で、このことを調べてみますと、やはりさうであることがわかりました。ただ、あの小さなからだで、長い旅行を續けるせゐか、途中で死んで歸つて來ない燕も、かなり多いといふことです。

日本からオーストラリアやまでは、一萬キロ以上もありますが、燕は、決して自分の國を忘れません。日本に春が來ると思へば、もう矢もたてもたまらず、北をさして進むのです。その小さな胸には、若葉のもえる日本の春の美しさを思ひ



浮かべてゐるでせう。青々と植ゑつけられた夏の稲田を、思ひ浮かべてゐるでせう。何よりも、あの家の軒下に作った古巢が、なつかしいでせう。

春になると、だれもが、このめづらしいお客の歸つて来るのを、待ちこがれてゐます。ちらりと燕の姿を見た人は、きつと

「今日、始めて燕を見たよ。」

といつて喜びます。わけでも、自分の家へ、いそいそと歸つて来た燕を迎へる人の心は、どんなにうれしいこととせう。

### 三 バナナ

今日はバナナのお話をしませう。

あの黄色な皮をむくと、中から白い、柔かな實の出て来るバナナは、きつとみなさんのすきな果物くだものにちがひありません。ところで、あのバナナが、どこでできるか、どういふ植物に生るか、みなさんはそれを知つてゐますか。

私たちのたべる、あの美しいバナナは、臺灣たいわんのゆたかな日光を受けて、育つた果物です。私たちが「ばせう」といつてゐるものに、よく似た植物に生る果物です。



かういふと、みなさんは、臺灣にさへ行けば、バナナの木がどこにでもあつて、黄色なのを、そのまま取つてたべるのだから、思ふかも知れませんが、それは大きなまちがひです。

いくら臺灣でも、あの美しいバナナが、野生でできるのではありません。ちやうど、みなさんのたべる、おいしい梨なしや水蜜桃すいもつたうなどが、畠でだいに育てられた木に生るのと同じことです。梨畠や桃畠へはいつて、枝のままもぎ取つてたべたら、みなさんはきつとしかられるでせう。臺灣のバナナにしても、それと同じことなのです。

臺灣では、よく山どひの土地に、バナナが植ゑてあります。

ちよつと遠くから見ると、バナナの畠は、キャベツか、それともカンナでも作つた畠のやうな感じがします。それほど、あの大きな、ばせうに似た植物が、きちんと行儀よく、しかも、たくさん植ゑてあるのです。ところによると、何百メートルといふ高い山の斜面が、ほとんど全部、バナナ畠であることがあります。





これほどたくさん植ゑてあるバナナが、一本一本だいに  
 にされてあます。まはりの草を取つたり、肥料をやつたり、  
 そのほか、いろいろせわをしてやるのです。實が生ると、梨  
 や桃と同じやうに、袋まで掛けてやるのです。

バナナは、苗を植ゑてから早くて十箇月、おそくても一年  
 二箇月たつと、數メートルの高さに成長して、花が咲きます。  
 古い株を切つて出た芽は、それよりも早く成長して花が咲  
 きます。

まづ、葉と葉の間から、太い、長い一本の軸ちくが出ます。それ  
 が花の軸で、その先に、赤むらさき色の、大きな蓮はすのつぼみの  
 やうなものがつきます。やがてそれが開くと、中に黄色な  
 花が、矢車のやうに並んで咲きます。かうして、花が次から  
 次へと、何段かに咲  
 いて行つて、ふさの  
 やうになります。

花が咲いてから  
 三四箇月たつうち  
 に、このふさがだん  
 だん大きくなつて、それにぎつしりと、みなさんのたべる、あ  
 のバナナが生るのです。





バナナは、まだ青いうちに取りつてかごにつめ、船に積んで遠方へ送ります。臺灣から、神戸や、東京へ通ふ汽船といふ汽船は、いつもバナナを積んであります。

青いバナナは、むろへ入れて置くと、四五日のうちに、皮が黄色になり、おいしい味が出て來ます。

太陽のゆたかな熱と光とを吸つて、すくすくと育つた臺灣のバナナは、かうしてみなさんのお目にかかります。北海道や樺太はいふまでもなく、北支那から、北滿洲の雪の夜の家々にも行つて、みんなを喜ばしてあります。

## 四 大連から

みなさん、たびたびお手紙をありがたう。元氣で何よりです。私もずつと丈夫で、毎日楽しく暮してあります。

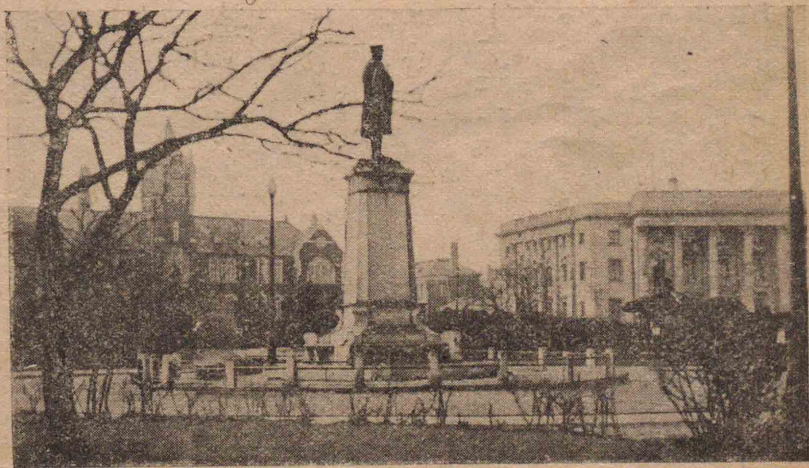
きのふは、明治節でした。講堂の壇に、かぎつてあつた菊の花を見て、ふと、みなさんのことを思ひ出しました。去年の今ごろ、學校園の菊の花を寫生しましたね。

私の送つてあげた大連の繪は、がきや、地圖が、教室に張つてあるさうですね。あの地圖を見てもわかるでせうが、町の名に、日露戰爭當時の將軍がたの名が取つてあります。

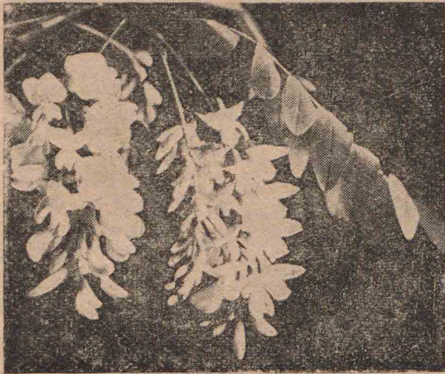


大山通とか、乃木町とか、東郷町とか、みなさうです。このほかまだありますから、さがしてごらん下さい。満洲は前から、日本と深いつながりがあつたわけです。

こちらへ来てから、半年餘りになるので、この町にもすつかりなれました。町には、いくつかの廣場があります。私は、繪はがきにある大廣場がすきです。圓形で、きれいな植込みのある廣場です。ここで、満



人の子どもや、ロシヤの子どもたちが、よく遊んであります。今はちやうど、菊の花がたくさん陳列されてあります。それ



から、アカシヤの並木の繪はがきもあつたでせう。あの下を何度も通りました。白いふさになつた花の咲くころは、よいにほひがして、そこを馬車に乗つて走るのには、楽しいものです。並木道をのぼつて行くと、忠靈塔が立つてあります。高いところにそびえてあるので、町からよく拜むことができます。

大連の港は、ずあぶん大きくて、毎日たくさん船が出た



り、はいつたりして、そのたびに、貨物が山のやうにおろされたり、積み込まれたりします。

大連から、特別急行列車の「あじあ」が出ます。これで新京へは八時間半、ハルビンへは十二時間半で行くことができます。また内地へは、毎日のやうに汽船が出ますので、それに乗ると、四日めには神戸くわいべに着きます。旅客機で朝たてば、夕方には大阪に着きます。

満洲國には、いろいろな民族が集つてゐて、みんな楽しく働いてゐます。これらの人たちは、日本語を、一生けんめいにおぼえようとしてゐます。たとへ、これらの民族のこと

ばがちがつてゐても、やがて日本語を通して、たがひにお話ができ、心持が合ふやうになります。このあひだ、支那町を見に行つた時、おもしろいかんばんが見つかりました。赤い布ぎれのふさをつるしたのですが、何のかんばんだらうと思つて、そばで遊んでゐた満人の子どもにたづねますと、

「あれは、支那料理の店のかんばんです。」  
と、日本語ではつきり教へてくれました。

朝夕ひえびえとして、空がほんたうにきれいに澄むころになりました。夜は星が美しく、手を延せば、すぐつかめさ



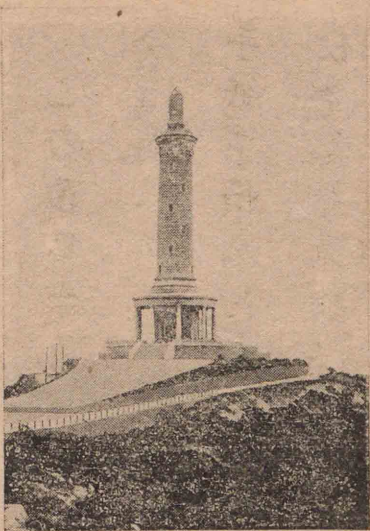
うに近く見えます。

かうりやんも大豆も刈り取つてしまひました。「カウリヤンカツテヒロイナア、ドツチヲミテモヒロイナア」と、一年の時に、みなさんが讀んだ歌のとほりだと、つくづく思ひました。

この春、私がこちらへ来たころは、雁も北へ行きましたが、今は南へ南へと飛んでゐます。日本へ行くのです。「雁に手紙を頼みたい」といふことを、昔からいひますが、ほんたうに、そんな氣持になることがあります。

秋の遠足には、旅順へ行きました。旅順はどこへ行つて

も静かな美しい町で、ここであんなはげしい戦があつたと



はどうしても思はれません。しかし、にれい山へのぼつたり、表忠塔を仰いだり、廣瀬中佐で名高い旅順港口を眺めたりすると、心持がひとり

で、ひきしまつて来るやうに思ひました。旅順の繪はがきを別に送りましたから、みんなでござんなさい。では、みなさん、おだいじに。さやうなら。

十一月四日

木村正一

四年生のみなさんへ



五 観艦式

朝もやが晴れて行く  
海——見わたすかぎり、  
くつきりと、堂々と、  
帝國の艦艇、おお、その雄姿。

第一列から 第五列まで、  
旗艦長門以下百數十隻、  
さんさんと秋の日をあび、

今日、おごそかに観艦式。

皇禮砲二十一發、

御召艦比叡は進む、

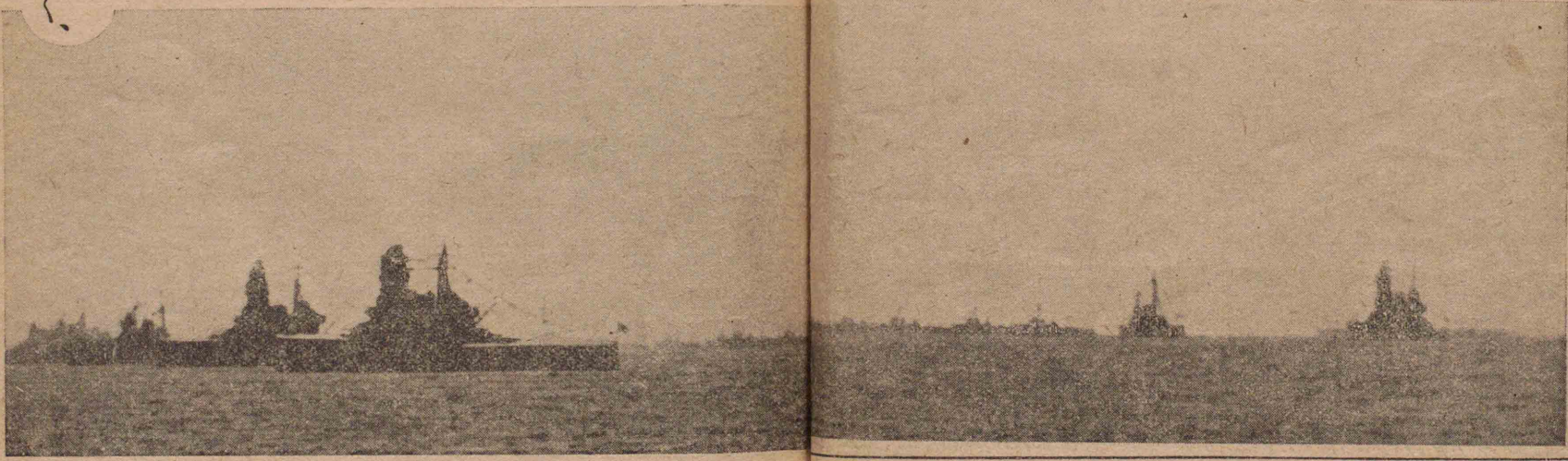
巡洋艦高雄を先導に、

加古古鷹を うしろに従へて。

マストに仰ぐ

天皇旗、ああ、天皇旗。

すべての艦艇は うやうやしく、





登舷禮 とうげん 君が代のラツパ。

大空の一角に、

飛行機の爆音、

たちまち數百機が、

空をおほうて分列式、分列式。

御召艦ははるばると、

艦列をぬつて進む。

青空ははてもなく澄み、

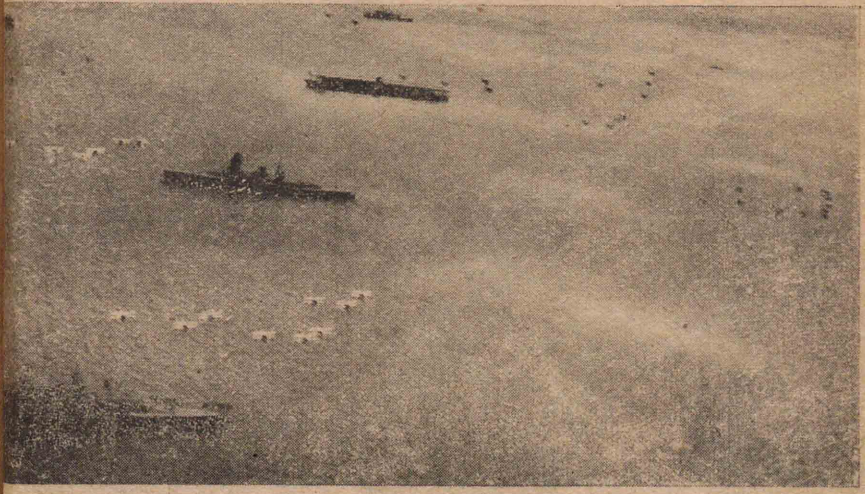
秋風はさわやかに海をわたる。

六 くりから谷

木曾義仲都へ攻めのぼると聞きて、平家はあわてて討手をさし向けたり。

大將平維盛は十萬騎を引きつれ、越中の國となみ山に陣を取る。義仲は五萬騎を引きつれ、これも同じくとなみ山のふもとに陣を取る。

兩軍たがひに押し寄せて、その間わづかに三町ばかりとなれり。





夜に入りて、義仲、ひそかにみかたの兵を敵の後にまはらせ、前後より、どつとどきの聲をあげさせたり。

不意を討たれて、平家の軍は、上を下への大ききわぎ。弓を取る

る者は矢を取らず、矢を取る者は弓を取らず。人の馬にはおのれ乗り、おのれの馬には人が乗り、後向きに乗るもあれば、一匹の馬に二人乗るもあり。暗さは暗

し、道はなし。平家の軍は逃げ場を失ひて、後のくりから谷に、なだれを打つて落ち入りたり。

親も落つればその子も落ち、弟も落つれば兄も落ち、馬の上には人、人の上には馬、重なり重なつて、さしにも深きくりから谷も、平家の人馬にてうづまれり。

大將維盛は、命からがら加賀の國へ逃げのびたり。

七 ひよどり越

平家の軍勢十萬餘騎、一の谷に城をかまへて、源氏の大軍を防ぐ。後は山けはしく、前は海近くして、守り堅ければ、源





氏も攻めあぐみて  
見えたり。

大將源義經みなもとのよしつね思ふ

やう、敵はけはしき山をた

のみ、後のそなへを怠りてあ

らん。われ、敵の後を突かん。」と

て、ひそかに三千餘騎を引きつれ、山を傳ひ

て、ひよどり越に出づ。見おろせば、いく百

丈の谷は、あたかも屏風びやうぶを立てたるがごと

し。大將、試みに數匹の馬を追ひ落したる

に、ころびて倒るるもあり、足ををりて死ぬるもあり。され

ど、三匹は無事にくだり、身ぶるひして立ちあがれり。

大將、これを見て、乗手が用心するならば、馬もけがはなか

るべし。いざ、進め。義經を手本にせよ。」とて、真先まへにかけく

だれば、三千餘騎、馬を並べてかけくだる。小石まじりの砂

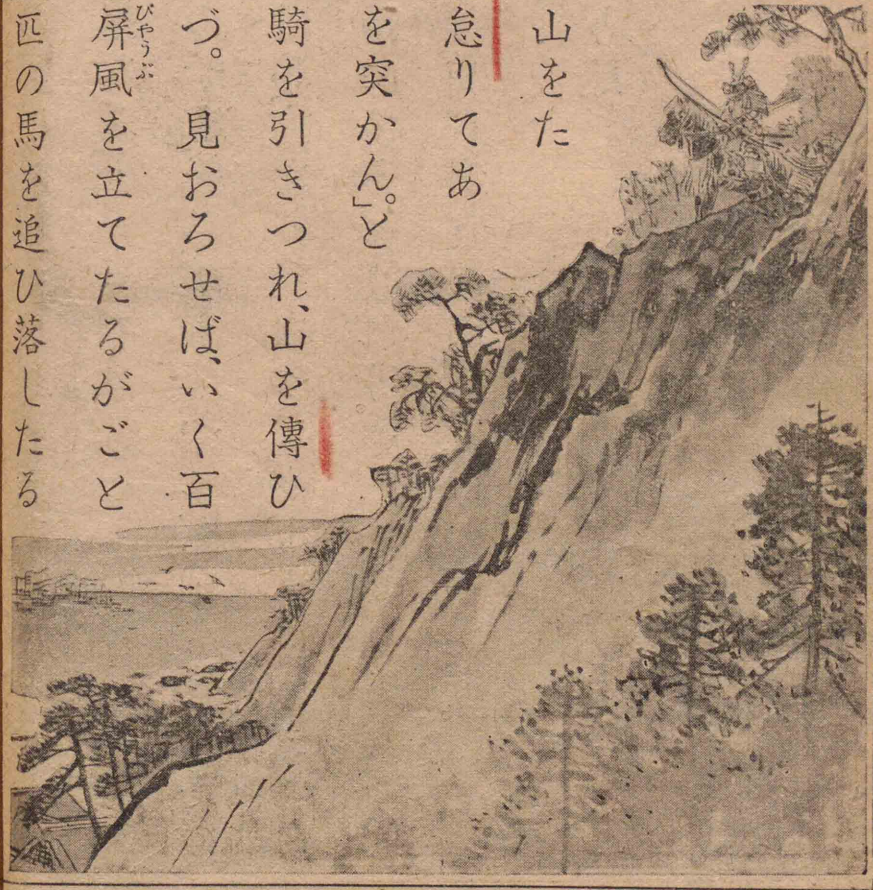
なれば、流るるやうにすべること二町餘にして、やや平なる

ところに着きぬ。

されど、これより下、十四五丈ばかりは、こけむしたる岩石、

壁のごとくつき立ちたり。今は先へも進まれず、後へひか

んやうもなし。皆々、顔を見合はせ、ただあきれあたるに、佐





原十郎義連進み出で、われらにはかかるところも平地に同じ。進めや。とて、真先にかけて進めば、三千餘騎も續いて進む。聲をしのばせ、馬をはげましつつ、なだれのごとくくだるさま、人わざとも思はれず。

くだるやいなや、三千餘騎、一度にとつとときをあげて、平家の城に火を放つ。敵ははたして不意を討たれ、あわてふためきつつ船に乗りて、皆ちりぢりに逃げ行きたり。

八 萬壽姫

源頼朝が、鶴岡の八幡宮へ舞を奉納することになつて、舞

姫を集めました。十二人のうち、十一人まではありました。が、あとの一人がありません。困つてあるところへ、御殿に仕へてある萬壽がよからうと、申し出た者がありました。頼朝は一目見た上で、萬壽を呼び出しましたが、顔も姿も美しく上品に見えましたので、さつそく舞姫にきめました。萬壽は、當年やうやく十三、舞姫の中ではいちばん年若でした。

奉納の當日は、頼朝を始め舞見物の人々が、何千人ともなく集りました。一番、二番、三番と、十二番の舞がめでたくすみました。が、そのうちで、特に人のほめたのは、五番めの舞で





した。この時には、頼朝もおもしろくなつて、いつしよに舞ひました。その五番めの舞を舞つたのが、あの萬壽姫であつたのです。

明くる日、頼朝は萬壽を呼び出して、

「さてさて、このたびの舞は、日本一のできであつた。お前の國はどこ、また親の名は何と申す。はうびは、望みにまかせて取らせるで

あらう。」

といひました。萬壽は恐る恐る、

「別に、望みはございませんが、唐系からいどの身代りに立ちたうございませぬ。」

と申しました。これを聞くと、頼朝の顔色はさつと變りました。變るも道理、これには深い事情があつたのです。

それより一年ばかり前のことです。木曾義仲きそよしなかの家來て手塚太郎光盛づかのたらうみつもりの娘が、頼朝に仕へておりました。この娘は、頼朝が義仲を攻めようとするのをさとつて、そのことを、義仲のところへ知らせてやりました。すると、義仲からはすぐ返



事があつて、すきをねらつて、頼朝の命を取れ。」と、木曾の家に傳はつてゐた。大切な刀を送つてよこしました。

光盛の娘は、そののち晝夜、頼朝をねらひましたが、少しもすきがありません。かへつて、はだ身はなさず持つてゐた刀を見つけられてしまひました。その刀に見おぼえがあつた頼朝は、さあ、この女にはゆだんができないといふので、石のらうへ入れてしまひました。唐糸といふのは、この女のことでした。

唐糸には、その時、十二になる娘がありました。それが萬壽姫で、木曾に住んでゐましたが、風のたよりにこのことを聞いて、うばをつれて、鎌倉をさしてくだりました。二人は、野を過ぎ山を越え、なれない道を一月餘りも歩き續けて、ようやく鎌倉に着きました。

まづ鶴岡の八幡宮へ參つて、母の命をお助けくださいと祈り、それから頼朝の御殿へあがつて、うばと二人でお仕へしたいと願ひ出ました。かげひなたなく働く上に、人の仕事まで引き受けるやうにしたので、萬壽、萬壽と、人々にかはいがられました。

さて萬壽は、だれか母のうはさをする者はないかと、氣をつけてゐましたが、十日たつても、二十日たつても、母の名を



いふ者はありません。ああ、母はもうこの世の人ではないのかと、力を落してあました。

ある日のこと、萬壽が御殿のうらへ出て、何の氣もなく、あたりを眺めてあますと、小さな門がありました。そこへ召使の女が来て、

「あの門の中へ、はいつてはなりません。」と申しました。わけをたづねますと、

「あの中には、石のらうがあつて、唐系様が押し込められてあます。」

と答へました。これを聞いた萬壽のおどろきと喜びは、どんなであつたでせう。

それからまもなくのことです。ある日、今日はお花見といふので、御殿は人ずくなでした。

萬壽は、その夜ひそかに、うばをつれて、石のらうをたづねました。八幡

様のお引合はせか、門の戸は細めにあいてあました。うばを門のわきに立たせておいて、姫は中へはいりました。月





の光にすかして、あちらこちらさがしますと、松林の中に石のらうがありました。萬壽がかけ寄つて、らうのとびらに手を掛けますと、

「だれか。」

と、らうの中から申しました。

萬壽は、格子かうしの間から手を入れて、

「おなつかしや、母上様。木曾の萬壽でございます。」

「なに、萬壽。木曾の萬壽か。」

親子は手を取りあつて泣きました。やがて、うばも呼んで、三人はその夜を涙のうちうちに明かしました。

これからのち、萬壽は、うばと心を合はせ、をりをり石のらうをたづねては、母をなくさめてあました。さうして、その明くる年の春、舞姫まひに出ることになつたのでした。

親を思ふ孝行かうかうの心には、頼朝も感心かんしんして、石のらうから唐糸を出してやりました。二人がたがひに取りすがつて、うれし泣きに泣いた時には、頼朝を始め居あはせた者に、だれ一人、もらひ泣きをしない者はありませんでした。

頼朝は、唐糸を許した上に、萬壽には、たくさんのほうびを與へました。親子は、うばといつしよに、喜び勇んで木曾へ歸りました。



九 林の中

葉は落ちて

明かるきこずゑ

林の中の 小道を行けば

一足ごとに、

かさこそと 鳴る落葉。

たたずみて、

しばし聞きいる

林の奥の秋の静けさ。

鳴くはいづこ、

ちち ちちと、鳥の聲。

見あぐれば

高きこずゑ

小枝小枝は かすかにふるふ

晴れたる空に、

細きこと 針のごとく。





十 グライダー「日本號」

一

「今日から、グライダーを作る。」と、先生がいはれたので、みんなは聲を出して喜んだ。道具は、小刀、はさみ、ものさし、分度器などである。

最初に、先生から、できあがりのグライダーを見せていた。だいた。

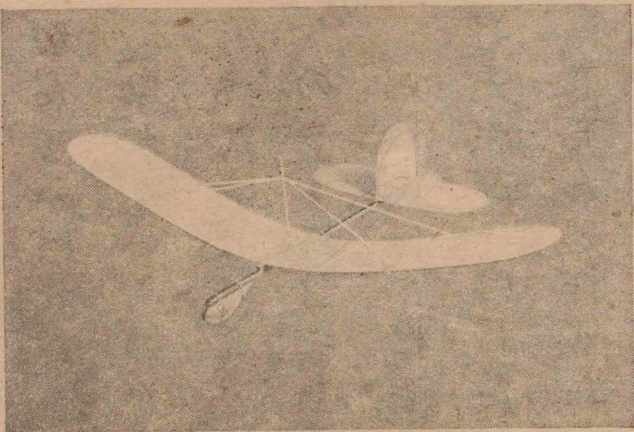
白い紙をはつた、いかにも飛びさうなかつかうをしてゐる。

「これで、百メートルの高さから飛ばすと、二キロは行くはずです。」

といはれたのには、おどろいた。私たちも、あんなのを作るのかと思つたら、なほうれしくなつた。

それから、グライダーの部分部分の名を、教へていただいた。胴體、その先端にとりつける鼻木、いちばん大きな主翼、それから水平尾翼、垂直尾翼などである。

見たところ、そんなにむづかしいとは思はれないが、先生





のお話では、少しでもくるひがあると、決してうまく飛ばないさうだ。どこまでも、正確に作りあげるといふ注意が、大切だといはれた。

「動かないものを作るなら、少しくらゐ寸法がまちがつても、できないことはありません。しかし、このグライダーのやうに、空中を飛ぶものになると、さうはいきません。

「いかげんにやつたのでは、決して飛びません。」と、先生がいはれた。

きちんと作るためには、設計圖がゐる。それで、私たちは、第一に設計圖をかくことになつた。これはたいへんむづかしいので、先生が、小さな穴で、しるしをつけてくださった紙に、かくことにした。穴と穴とを結びつけて、線を引いて行くと、いつのまにか、りっぱな設計圖ができる。線を引きながらも、私の心に浮かぶものは、青い空に飛んでゐる眞白なグライダーであつた。

二

機體の材料をいただいて、いよいよ製作にとりかかつた。みんなは、一生けんめいだ。話などをしてゐるものは一人もゐない。私は、胴體に鼻本をしつかりと結びつけた。結ぶ系の數にも、ちやんときまりがある。これは重さに關係



があるからだ。

次に翼を作るために、ひごをまるく曲げなければならぬが、これはなかなかむづかしい。ただ曲げただけでは曲らない。それで、紙でひごを、ごしごしとしごきながら、熱くして曲げる。曲げては設計圖に當てて見て、形を整へる。曲げ過ぎて、ひごを折つてしまつた者もあつたやうだ。

私は、ちやうどきちんとできたので、それを胴體にとりつけた。主翼も尾翼も、しつかりと結びつけた。

「やつと骨組ができた。」

と思はずそれを持ちあげて、自分ながら見とれてゐると、先生が來られて、重心のところを指にのせて、

「これはいい。よく飛びさうです。」

といはれた。

三

最後の仕事は、この翼に、紙をはることである。もし、しわでもできると、風の受け方がうまく行かないので、水平に飛ばない。できるだけおちついて、氣をつけながら、少しづつはつて行つた。

その時、もうだれかが、

「さ、飛ばさうかな。」



といふと、

「早いなあ。」

といふ者もあつた。すると先生は、

「あわてないで、よく調べてごらん。」

といはれた。それで、またみんなは静かになつた。

やつと、ぴんとはりあげた。少しぬれてあるけれども、てきあがつたのだ。私は、そつと翼をなでてみた。何ともいへない、かはいい氣持がして来る。

『では、晝休みに、みんなて飛ばしてみることにします。』と、先生がいはれた。

私たちは、めいめいのグライダーを机の上に置いて、おべんたうをたべた。

四

運動場に出ると、北の風が少し吹いてあつた。ほんたうによいグライダー日よりだ。みんなは、さかんに飛ばした。

私も飛ばしてみた。

飛ぶ、飛ぶ。二十メートルも一氣に飛んで行つた。私は自分で拍手をした。走つて行つてグライダーを拾ひあげると、なほかはいくなつた。

先生が、運動場の向かふのがけの上で、



「集れ。」

といはれたので、私たちはみんなそちらへ走つて行つた。

「さあ、ここからいつしよに飛ばしませう。一列にお並びなさい。」

用意、どんで、飛ばすのですよ。

私たちは、両手にグライダーを持ちあげた。

「用意——どん。」

白い花びらをまき散ら



したやうであつた。その中を私のグライダーは、真直に飛んで行く。ちう返りをして落ちるもの、まつさかさまに落ちるもの、横へすべつて行くもの、見るまに、飛んである数は少くなつて、たつた二機になつた。みんなが、「わあつ。」といつて、應援をする。

二機が並んで行くのを見てみると、胸がわくわくした。一機が風にあふられて、上へ向かつたかと思ふと、横へ傾いて落ちてしまつた。

私のがまだ飛んで行く。涙が出て來た。まもなく、靜かに下へおりて行つて、地に着いた。



みんなが「萬歳」と大きな聲で叫んだ。  
 私はこのグライダーに「日本號」といふ名をつけることに  
 した。

十一 大演習

一

ばかばかばかと馬のひづめの音がして来たと思ふと、騎  
 兵の一隊が勇ましく私たちの前を通り過ぎました。  
 軍隊が今夜この町を通るので、私はおかあさんにつれら  
 れて、夕方から湯茶接待所へ手傳ひに来たのでした。

やがて、また、ごうごうとすき  
 まじい音をたてて、たくさんの  
 戦車が来ました。ものすごい  
 地響きにおどろいて、町の人々  
 は、皆とび出して来ました。續  
 いて、歩兵が近づいて来ました。  
 ちやうど接待所の前で、隊長  
 が「二十分間きうけい」と號令を  
 掛けました。兵隊さんは、やれ  
 うれしやとばかり、私たちの前





へ押しかけて来ました。

「ごくろうさま。おつかれでせう。」

どいたはりながら、在郷軍人や婦人会や、女子青年團の人々が並んで、麥湯をついであげてみます。ほこりと汗で、眞黒になつた兵隊さんが、「この水筒すゐとうにも入れてください。」「これにも。」これにも」と出されるので、私たちは、いそがしくて目がまはるやうです。

かうして、あとからあとから来る兵隊さんを迎へて、どうとう、夜の十一時ごろまで働きました。

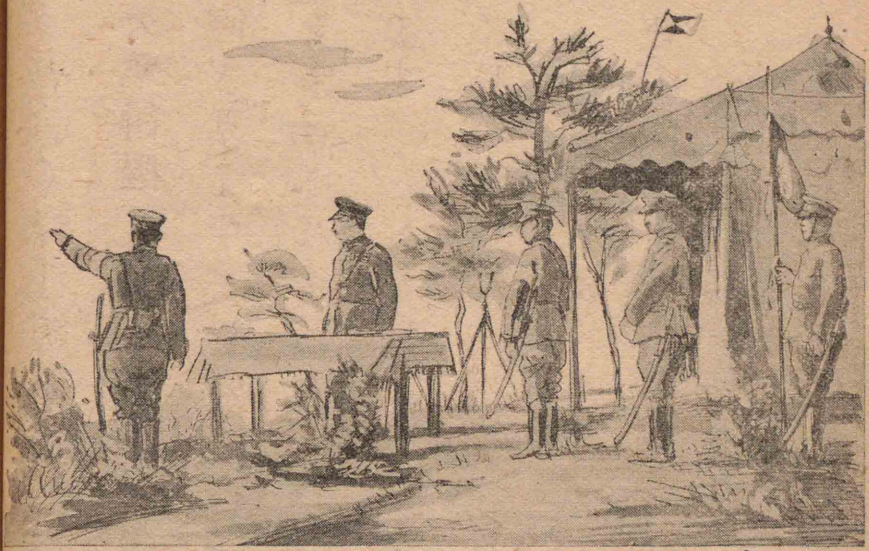
二

夜の明けないうちから、北の方で、銃聲が聞えました。私たち女子の組も、先生につれられて、大演習の拜観に出かけました。

飛行機が勇ましい音をたてて、飛んで来ました。ときどき、あたりをふるはすやうな、大砲の音がします。そのたびに、早く飛んで行つて、見たいやうな気がしました。

けさは、寒い北風が吹きまくり、たんぼの水たまりには、うすい氷さへ張つてあります。拜観に来た人々は、皆外たうのえりに、首をうづめてみました。中には、たき火にあたつてゐる人もありました。





野外統監部を遠く望むところ  
 るで、私たちは拜観してあま  
 たが、どこで大砲を撃つてあ  
 るのか、わかりません。ただ歩  
 兵が木の小枝や、わらをからだ  
 につけて、土手のかげをかけて  
 行くのを見ました。騎兵が土を  
 けつて走るのを見ました。戦  
 のやうすは、一向わかりませ  
 ませんでした。

やがて、野外統監部へ、天皇旗をお進めになつて、御統監の大元帥陛下がお出ましになりました。最敬禮をしてから仰ぎ見ますと、風當りの強い高地であるのに、陛下は外たうをも召されず、熱心に戦況をごらんになつていらつしやいます。それを拜した時、私たちは、何ともいへない感じがして、目が涙でいつぱいになりました。

拜観の人々も、今は外たうを着てゐる者は、一人もありませんでした。たき火も、いつのまにか消えてあました。

三

今日は、兵隊さんが、私の家にもどまるといふので、急いで



学校から歸つて來ました。すると、もう兵隊さんは來てゐて、兵器の手入れをすまし、靴下を洗つたり、靴をみがいたりしてゐました。

お湯からあがつて、生き返つたやうだ。といつてゐる兵隊さん、そのそばで、銃や劔を見せてもらつて大喜びの弟、夕飯の支度にいそがしいおかあさん。私も、兵隊さんの靴下を火にあぶつて、かわかしてあげました。

夕食後、兵隊さんから、新しい兵器について、おもしろいお話を聞きました。おとうさんも感心して、

「自分の行つてゐたころとは、すつかり變つた。進んだものだ。」

といひました。

明くる朝は早く起きて、出發の支度をしてあげました。

おばあさんは、つかれないやうにと、焼いたするめや氷砂糖を、紙に包んであげました。

まだ明けきらない空に、またたく星を仰ぎながら、おとうさんについて、私も町角まで見送りました。皆が、萬歳、萬歳と、ちやうちんをあげるのに答へて、兵隊さんたちも、萬歳、萬歳と叫びながら行きました。

私たちは、その勇ましい姿を、いつまでも見送つてゐまし



た。

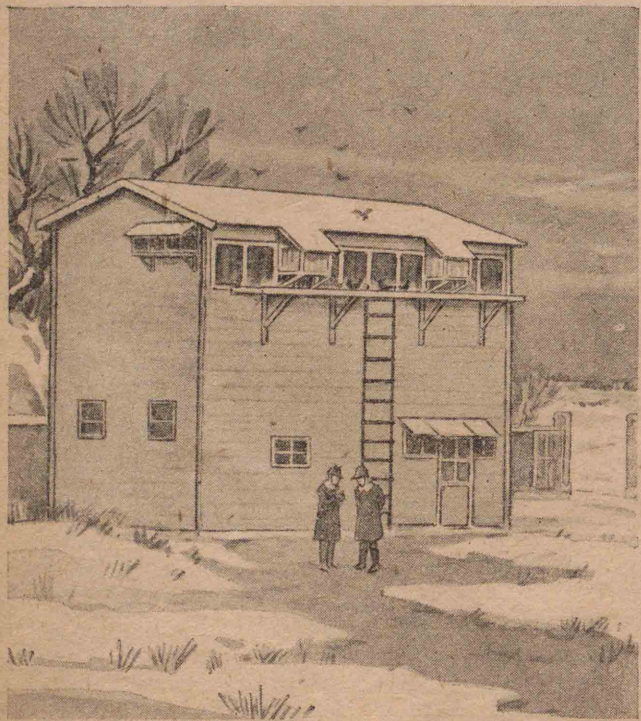
十二 小さな傳令使

昭和六年十二月三十一日の夕暮に、大石橋守備隊の鳩舎へ、血に染まつた一羽の鳩が飛んで来た。取扱兵がすぐだきあげて足の番號を見ると、四日前に、錦州へ向けて出發したわが軍が、つれて行つた鳩であつた。信書管は血にまみれ、身には重い傷を負つて、息もたえだえであつた。

錦州へ向かつたわが軍は、三十日、とつぜん敵の大軍に出あつて、はげしく戦つた。早くこのことを、大石橋守備隊へ知らせようとしたが、電信も電話も、敵のためにこはされたので、通信は、ただ鳩にたよるほかはなかつた。

通信紙をつめたアルミニウムの管を、鳩の右の足にとりつけた兵は、しばらく鳩のからだにほほをすりつけて、途中の無事を祈つた。小さな傳令使は、胸をふるはせながら、かはいいで空を見あげてゐた。

戦の真最中に、鳩は空高





く舞ひあがつた。二三回、上空に輪を急がいて飛んでゐたが、すぐ方向を見定めて、矢のやうに飛んで行つた。



寒い夕空をもものともせず、南東をさして高く飛んでゐた鳩は、ふと、たかの一群を見たので、すばやく低空に移つた。すると、今度は敵軍に見つけられて、一せいの射撃を受けた。

一弾は、鳩の左の足をうばひ、一弾は、その腹部をつらぬいた。

この重い傷にも屈しないで、鳩はなほしばらく飛び續けてゐたが、とうとうたまりかねて、とある木の枝に止つた。

ちやうどその時、附近にゐたわが兵が、これを見つけた。つかまへようとして手をさしのべると、鳩は、また翼をひろげて飛びあがつた。飛び去つたあとの木の枝には、かはいさうにも、赤い血がついてゐた。

弱りきつたこの小さな傳令使は、その夜、どこで休んだことであらう。明くる日になつて、やつと、大石橋の自分の鳩舎にたどり着いたのである。

大石橋守備隊では、さつそく信書管をとりはづして、手あつくかんごしたが、任務を果して氣がゆるんだのか、鳩は、取



扱兵の手にだかれたままつめたくなつてしまつた。

十三 川土手

春來たときは

川土手に、

すみれの花が

咲いてゐた。

ゆらり ゆらゆら、春の水、

白い帆かげがうつつた。

夏來たときは

土手の草、

ぼくのせいより

高かつた。

ちらと のぞいた大川に、

モーターボートが走つてた。

秋來たときは

すすき原、

赤いどんぼが



飛んでゐた。

さやさやさやと 鳴る風に、

水は底まで澄んでゐた。

今は枯草、

川土手を、

寒い北風

吹きまくり、

ひたひたひたと、川の波、

あし間の舟に寄つて来る。

十四 扇あふぎの的

屋島の合戦に、源氏は陸に陣を取り、平家は海に船を浮かべて、相對せり。折しも、美しくかざりたる船一さう、平家の方よりこぎ出す。見れば、へさきに長き竿を立て、赤き扇をとりつけ、一人の官女、その下に立ちて、陸に向かひてさしまねく。

源氏の大將義經よしつね、これを見て、

「かの扇を、射落す者はなきか。」

家來の者進み出で、



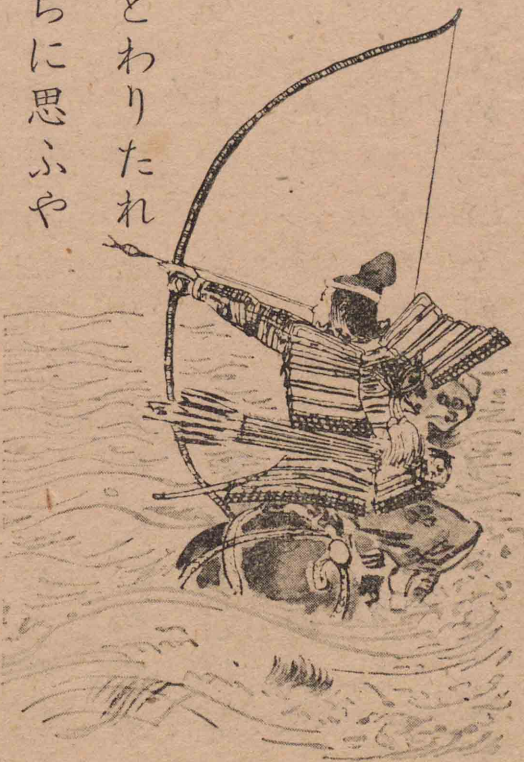
「那須餘一なすのよいちと申す者あり。空飛ぶ鳥も、三羽に二羽は、かならず射落すほどの上手なり。」

と答へたれば、それ呼べ。とて、餘一を召し出す。

餘一はいくたびかことわりたれども、許されず。心のうちに思ふや

う、萬一射そんずるならば、弓切り折りて自害せんとして、馬にまたがり、海中に乗り入れたり。

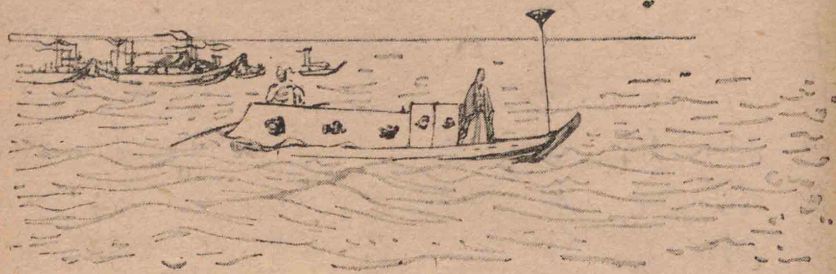
時に風強く、波高ければ、船はゆりあげられ、ゆりさげられ、



扇は風にひらめきて、いかなる弓の名人も、ただ一矢にて射落すことは、むつかしと見えたり。

餘一、目を閉ぢ、あの扇の真中を射させたまへ。と、しばし神に祈りて見開けば、風やや静まり、扇も少しくおちつき、射上げに見えたり。ただちに弓に矢をつがへ、ねらひを定めてひようと放つ。

扇は、かなめぎはを射切られて、空高く舞ひあがり、二度三度、ひらひらとまはりて、さ





つと海中に落ち入りたり。

陸には大將義經を始め、源氏の軍勢、馬のくらをたたきて喜びたり。海には平家、ふなばたをたたきて、どつとほめあげたり。

十五 弓流し

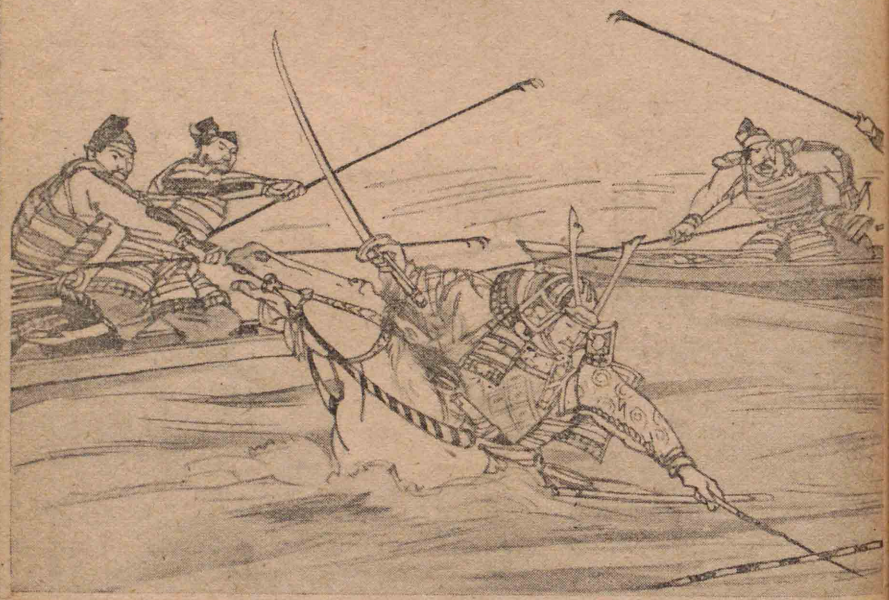
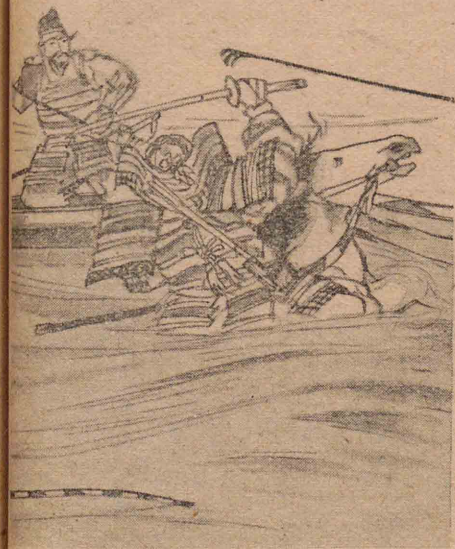
義經<sup>よしつね</sup>馬を海中に乗り入れて、はげしく戦ふ折から、いかなるはずみにか、わきにはさみ持ちたる弓を、海中にとり落したり。

義經は馬上にうつぶし、むちの先にて、流れ行く弓をかき寄せ取らんとすれば、敵は、船中より熊手<sup>くまて</sup>をもつて、義經のかぶとに、打ち掛け打ち掛け、引き倒さんとす。

源氏の者ども

「その弓、捨てたまへ。捨てたまへ。」

と口々にいふ。





されども義経は、太刀にて熊手を防ぎ防ぎ、つひに弓を拾ひあげて、陸にのぼる。

「たとへ、金銀にて作りたる弓なりとも、御命には代へがたし。」

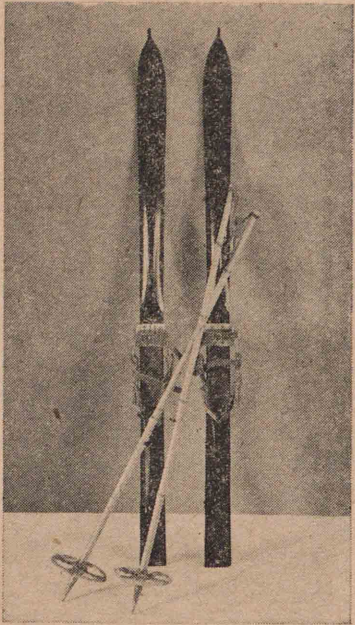
と申せば、義経笑ひて、

「弓を惜しみたるにはあらず。をぢ爲朝ためともの弓のやうならば、わざと落しても與ふべし。弱き弓を取られて、これが

義経の弓なりと、あざけらるるは、源氏一門の恥ならずや」といふ。

源氏の者ども、これを聞きて、「まことの大將かな」と、皆感じあり。

十六 山のスキー場



ぼくたち四十人は、野田先生と石井先生につれられて、山のスキー場へ行つた。

前の日に、こな雪がたくさん降つたので、スキーをするには、ちやうどよかつた。

集合地は、村はづれの一本杉のそばであつた。ぼくたちは、ルツクサツクを背負つて、スキーをつけ、二本の杖をつき



ながら、そこへ集つた。

「みんなそろつたね。さあ、出かけよう。」

と、野田先生が先頭に立たれ、石井先生が、みんなのあとから來られた。

初めは二列で進んだが、谷あひでは一列になつたので、ずあぶん列が長かつた。

だんだんのぼり坂になると、からだかほてつて汗が出る。みんなだまつて、あへ

ぎながらのぼつて行つた。スキーの雪をすべる音だけが、氣持よく聞える。急な坂にかかると、前の方で、野田先生が、

「さあ、元氣を出して。」

と大きな聲を掛けられる。石井先生も、ずつと後の方から、

「しつかりのぼれ。」

と叫ばれた。この聲にはげまさされて、ぼくたちは、一生けんめいにのぼつて行つた。

松林の中を通つて行く時、だれかが、

「やあ、鬼、鬼。」

と大聲に叫んだ。見ると、大きな鬼が、ちやうど小松の中へ、とび込んだところであつた。

「あれがスキー場だ。もう一息。」





と、野田先生が杖でさされる方を見ると、なるほどりつばな  
スキー場で、ジャンプ臺も見える。みんなは喜んで、急に元  
氣を出した。

いよいよ、スキー場に着いた。いかにもすべりよささう  
な傾斜が、長く續いてゐる。

「先生、まだすべつてはいけませんか。」

「先生、もうすべらしてください。」

と、みんながいふと、

「待て待て。もう少し上まで行かう。」

と、石井先生が、後の方から追ひたてるやうにいはれた。

百五十メートルほどのぼつた時、ぼくが、

「先生、もういいでせう。」

といつた。すると、野田先生が、

「ようし、ここからすべりたい者はすべつてよろしい。」

といはれた。

ぼくたち三四人は、列を離れて、真一文字にすべりおりた。  
すばらしい早さに、からだもスキーも一つになつて、びゅう  
とうなる。まるで、空中滑走くわつそウをしてゐるやうだ。ふもとへ  
来て急停止すると、ぱつと雪煙が立ち、汗ばんだ顔に、雪のこ  
なが降りかかる。



やがて、十人、二十人、次々にすべり始めた。思ひ思ひに、スキーのあとを雪の上に急がきながら、小鳥のやうにおりて来る。途中でころんで、雪だるまになつて起きあがる者もある。にこにこ笑ひながらおりて来る者、まじめな顔でやつて来る者もある。みんなが急停止をすると、雪煙が一度にあがつた。

先生は二人とも、まだ上へ上へとのぼつて行かれたが、二百五十メートルものぼつたところで、杖をあげて、「さあ、おりるよ」といふ合圖をされた。ぼくたちも、みんな杖を振つて、それに答へた。

野田先生が先に、すぐ續いて石井先生がすべられる。そのみごとなすべりぶりに見とれてみると、先生たちは、もう目の前へ来られた。はげしい制動を掛けられると、もうもうと雪煙が立つ。雪煙が消えて、先生の笑顔が浮かんだ。それからぼくたちは、のぼつて行つてはすべり、おりてはまたのぼつた。

ジャンプ臺では、上手な人たちが、かはるがはるジャンプをしてゐる。

「おうい、先生も、ジャンプをなさるさうだ。」  
と、だれかが叫んだ。みんなそこへ行くと、今、石井先生がす



べられるところである。たちまち先生のからだはちうに  
浮かんだ。両手をひろげて高くとばれる姿は、なんといふ

勇ましさであらう。みんなは、  
思はず手をたたいた。

今度は野田先生がとばれる  
番である。先生は鉢巻をして、  
すべり出された。すばらしい  
早さだ。

「えいっ。」

掛聲といつしよに、先生の中から



だは、美しくちうをとんで行く。

「萬歳」と、だれかが叫んだ。

野田先生と、だれかが叫んだ。

四十メートルも空中をとんで、先生は地上の人となられ  
た。

お晝になつたので、雪の上で、楽しいおべんたうをたべた。  
午後は、先生について、一人一人、正しいすべり方を教へてい  
ただいた。

歸りは、村までくだり坂の道だ。林をぬつて長距離をす  
べるのは、ほんたうに愉快であつた。



十七 廣瀬中佐 ひろせ



とどろくつつ音

飛び来る弾丸。

荒波あらふ

デッキの上に、

やみを貫ぬく 中佐の叫び、

「杉野はいづこ、杉野はあずや。」

船内くまなく

たづぬる三たび、

呼べど答へず、

さがせど見えず。

船はしだいに 波間に沈み、

敵弾いよいよ あたりにしげし。



今はどボートに

移れる中佐、

飛び来る弾に

たちまち失せて、

旅順港外 うらみぞ深き、

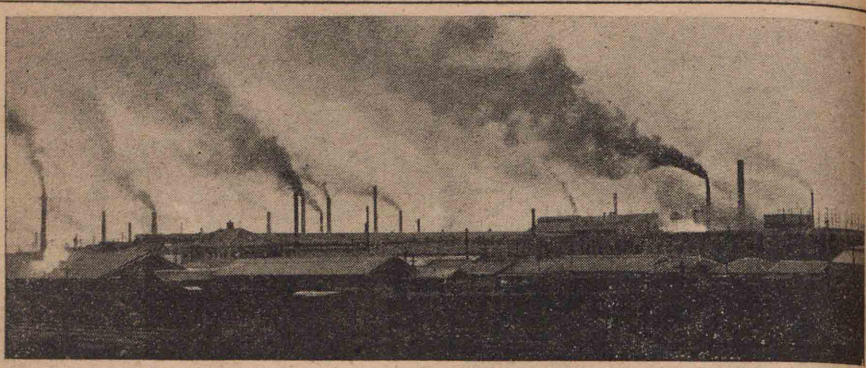
軍神廣瀬と その名残れど。

十八 大阪

汽車で大阪驛に近づくと、晴れた日でも、空がどんよりとくもつたやうに見えます。それもそのはず、大阪は、煙の都

とさへいはれ、大小一萬以上の工場がここにあつて、林のやうに立ち並ぶ煙突から、絶えず黒い煙を吐き出してゐるのです。大阪は、實に日本第一の工業都市で、各種の工業がさかんに行はれます。

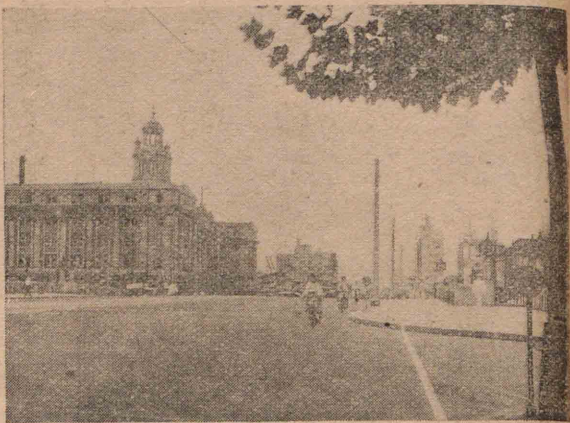
大阪は、また、昔から商業のさかんなところですが。市を貫ぬいて流れる淀川よどはいく筋にも分れて、西の大阪灣に注いでゐます。その川水は、市内の何十といふ堀から堀へ通じ、川と堀とは、まるで網の目のやうに、組





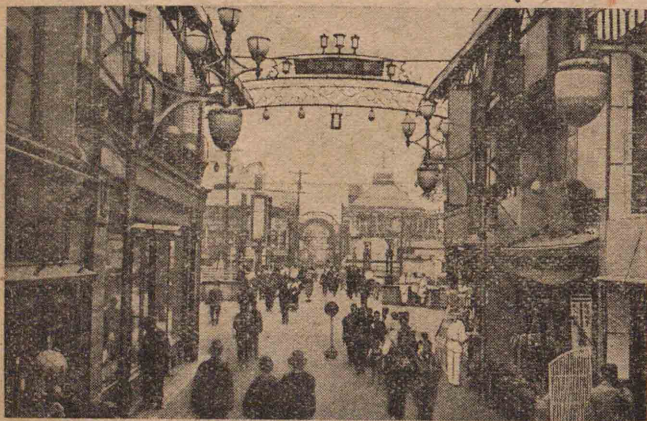
み合つてゐます。それで大阪は水の都ともいはれてゐるのです。大阪の港に集つて来る船の積荷は小船でこの川や堀を傳はつて大阪の町々にあげられます。また大阪の物産も堀や川を通つて港へ送られます。かうして多くの品物が自由自在に集つたり散らばつたりするのでしぜん大阪が一大商業都市として發達したのです。

水の都ですから大阪には大小千何百といふ橋があります。大阪驛から南へ御堂筋といふ大通を進むとやがて大江橋を渡つて中之島といふところへ來ます。それは淀川の中にある細長い島ですがこの島に向かつて北から南か



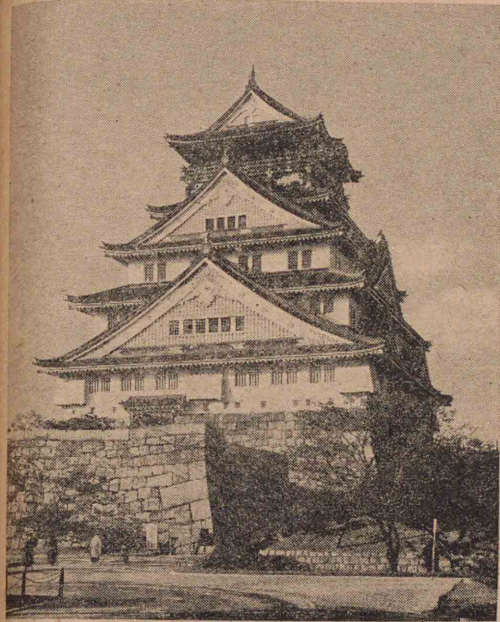
らかけ渡された橋ばかりでも二十もあつて、まるで中之島をたぐさんの串でさし通したやうになつてゐます。中之島やその附近には、高い建物が並び、島の東の端には、中之島公園があります。

公園はさう廣くはありませんが大川をめぐらした眺めはいかにも大阪らしいけしきです。

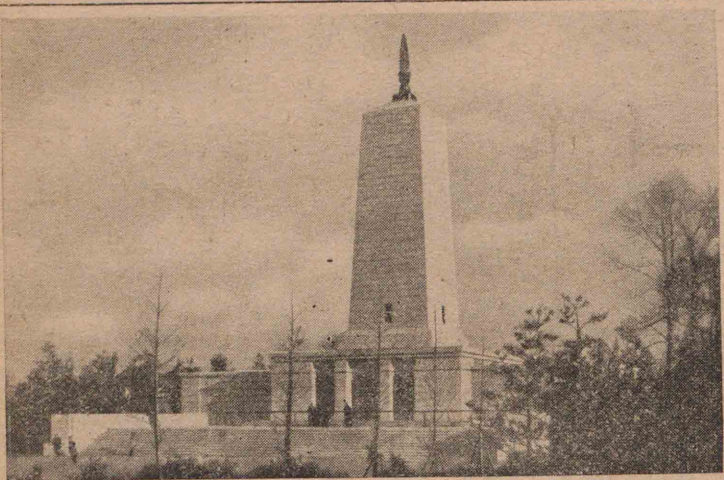




いちばんにぎやかな場所は、市の中央の、道頓堀附近の町  
町です。心齋橋筋にはりつばな商店が並び、堀ばたの町に  
は、映畫館や劇場があつて、人の波があとからあとから押し  
寄せます。



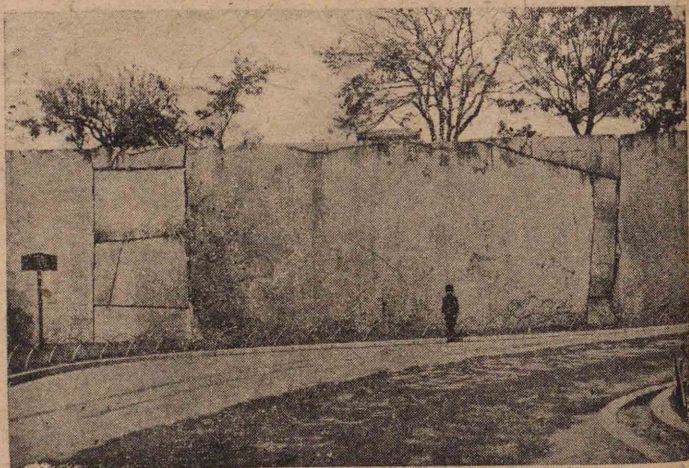
名所としては、まづ大阪城が  
あります。豊臣秀吉の建てた  
城で、近年復興された天守閣に  
のぼると、大阪が一目に見えま  
す。石垣の石の大きいのは有  
名ですが、中でも縦六メートル、



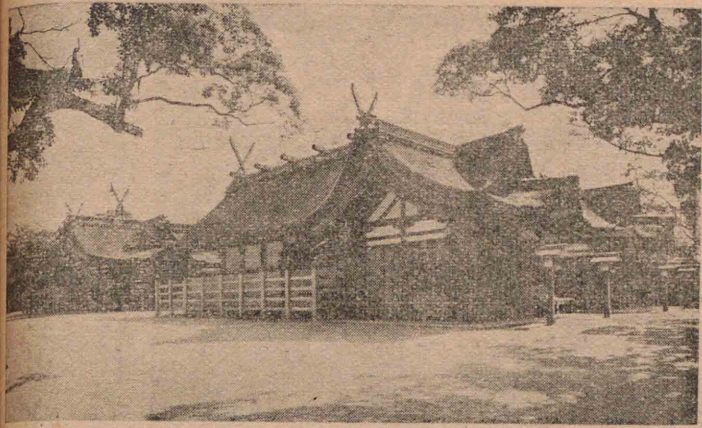
横十一メートルといふすばらしく大  
きな石には、だれでもびつくりさせら  
れます。

城を出ると、堀  
ばたの廣場に、教  
育塔がそびえて、  
白い姿を、くつき  
りと大空に現し  
てゐます。

仁徳天皇をおまつりしてある高津





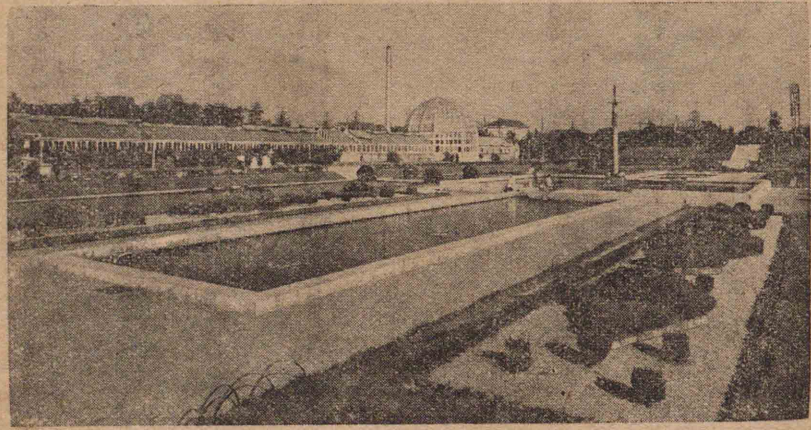


宮みやや、その近くにある生國魂神社いこくたま、ずつと南にある住吉神社すみよし、また、日本最初の寺といはれる四天王寺など、みんな古いいはれのある神社やお寺です。ことに住吉神社は、境内けいだいが広く、社殿がおごそかに拜まれます。四天王寺に近い天王寺公園には、美術館や動物園があり、また、木立や、池や、運動場や、広い花壇くわだんなどがあります。

大阪港は、防波堤が遠く續き、港内の岸壁かべには、一萬トン級の汽船が横づけになります。大小の船の帆柱が、林のやうに見えます。

市内には、自動車自動車が走り、電車が走り、地下鐵道も通じてありますが、川や堀に、何千といふ船が通つてゐるのは、大阪でなくては見られないけしきです。郊外電車かうがいでんしゃの發達してゐることも、飛行場のあることも、大阪のほこりの一つになつてゐます。

昔、仁徳天皇は、この地このちに都をお定めになつて、堀江をお開きになり、また、六年間

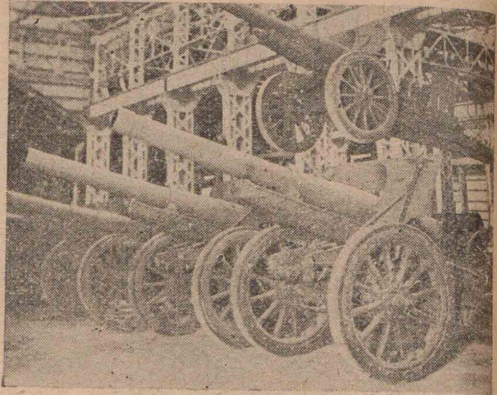




の税を免じて、民のかまどの煙の立つやうになつたのを、たいそうお喜びになりました。大阪が、水の都として發達し、また、煙の都と呼ばれて、今日のやうな大都市となつたのは、まことに、尊いはれがあるといはなければなりません。

十九 大砲のできるまで

飛行機を撃ち落す高射砲、戦車の厚い鋼鐵の板を射抜く對戦車砲、馬や牽引車で引いて行く野砲や重砲——かうしたいろいろの大砲は、どういふふうにして、こしらへられるでせう。みなさん、考へてみたことがありますか。



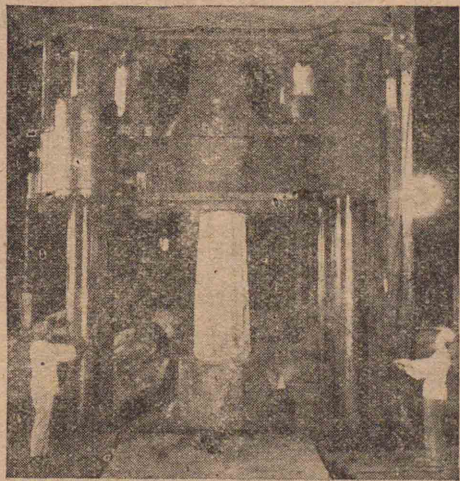
大砲を作る工場へ行つてみると、大きな電気仕掛の釜の中で、白熱された鐵が、どろどろにとけてあます。その鐵を、大砲の形とは似ても似つかない、いがたへ流し込みます。

いがたから取り出された、大きな鐵のかたまりは、もう一度真赤に焼かれます。それを大きな鐵の槌が、ごんごんと地響きをたてながら、臼のやうにつぶしたり、棒のやうに延したりして、十分にきたへます。まるで、つきたての餅を、手でまるくしたり、長くしたりするの



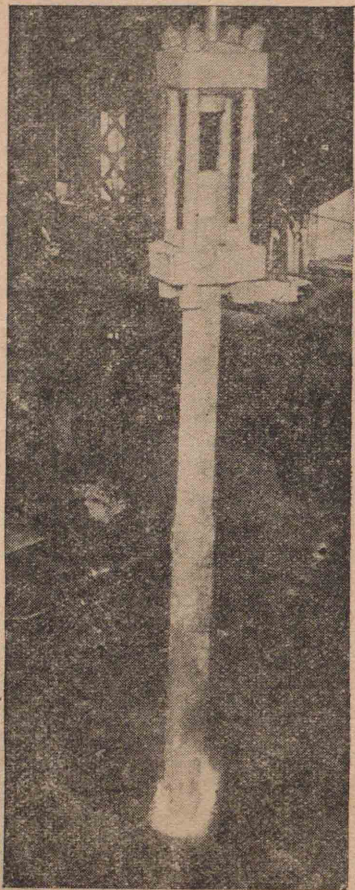
と同じやうに、大きな機械が、思ふままに、鐵のかたまりを手玉に取つてゐるのです。

かうして、きたへにきたへるのですが、それだけではまだ足りません。長い柱のやうに延されたこの鐵が、今度は起重機につられながら、せいの高い大きな爐へ入れられて、高い温度で熱せられます。鐵の柱は、熱い爐の中で、じつとがまんをしてゐるのです。



やがて、爐のとびらがあいて、中から、眞赤に焼かれた鐵の火柱が、起重機でつられたまま、そろそろと外へ出て來ます。

おやと思つてゐる間に、動いてゐた鐵の火柱が、靜かに止ります。止つたとたん、するすると下の方へおりて來て、深さが十メートルもあるやうな、深い油の桶をけの中へ、眞赤なから



だを沈めにかかります。黒々と光つてゐた油の表面からは、一時に、ぱつと

ほのほがもえあがり、眞赤な鐵の柱は、そのほのほの中を、下へ下へと沈んで行きます。

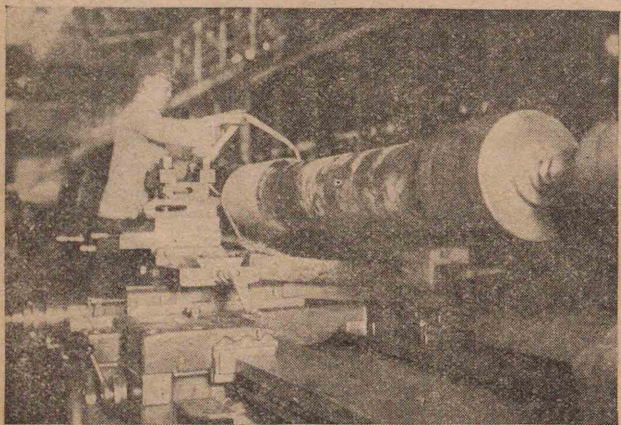
このやうに、打つたり、熱したり、冷したりして、鐵の質を固



くし、強くします。さうしなければ、あの力の強い火薬を一時に爆發させて、大きな砲彈を撃ち出すやうな、がんばりやうな大砲にはならないのです。それは、ちやうどみなさんが、暑さや寒さにうち勝つて、からだや心をきたへて行くのと、同じことなのです。

かうしてきたへられた鐵の柱は、今度は機械に掛けられて、外側をまるくけづられて行きます。黒くて、ざらざらしてある表面が、しいにはぎ取られて行くとき、始めて、あの鐵の白い光が、かがやき始めます。その機械のそばには、高等料を卒業して二三年ぐらゐの、若い職工さんシヤウジもゐて、油をさしたり、けづられて行く砲身のまるみを計つたり、こまかな注意をしながら、熱心に働いてゐます。

外側がきれいにけづられて、砲身の長さど、まるみどが、きちんとそろつて来ると、次には、砲彈を撃ち出す通路が、切り抜かれるのです。まるい鋼鐵の棒の先についてゐる、するどい刃物が、ぐるぐるまはりながらやつて来る砲身の中へ、ぐいぐいとくひ入つて行きます。一センチ、二センチと、固い砲身に穴があけられて行





きます。ほんの少しでも、あけ方がくるふと、大砲の役目を果すことができないので、職工さんは張りつめた氣持で、機械が運轉するのをじつと見つめてゐます。

かうした仕事がもう一度くり返されると、砲身の中には、きらきらと鏡のやうにかがやいた、砲彈の通る路ができていきます。

このやうに、いろいろな仕事を重ねて、やつと一本の砲身ができてあがるのです。

しかし、砲身ができただけでは、まだ大砲がすつかりできあがつたとはいへません。この砲身をのせる、鋼鐵で作つた臺もいります。砲彈を込めて撃ち出す時、砲身の根もとを固くふさぐものも必要です。それらも、やはり同じ工場、受持受持によつて作られます。作られたものは、最後に、職工さんたちの力強い手で、だんだん組み立てられて行きます。

しあげを終ると、高射砲は、まるい鐵の臺の上で、砲身を空へ向け、今にも飛行機を撃ち落としさうなかつかうになります。ゴムの車輪の上にとりつけられた、小がたの對戦車砲は、どんなに早く走る戦車でも、どんどん撃ちまくるやうな身がまへになります。野砲も、重砲も、ずらりと大きなから



だを横たへて、さあ、いつでもお役にたつぞと、どつかり身が  
まへるやうになります。

かうして、いろいろな大砲が、どしどし作られて、日本の國  
をしつかり守つてくれるのです。

二十 振子時計

イタリヤのピサの町に、夕もやがこめて、日が静かに落ち  
て行くころでした。

ガリレオといふ學生が、この町の有名な大寺院へ、お参り  
をしました。寺院の中は、もう、うす暗くなつておりました。  
ちやうど今、番人が、ランプに火をつけたばかりのところだ  
した。

天井からつるしてある、この大きなランプが、ふと、ガリレ  
オの心をとらへました。

「おや。」

と思ひながら、そこに立ち  
止つて、じつと見つめまし  
た。

つるしたランプは、静か  
に左右へ動いてゐます。





それは、つい今しがた、番人が火をつけるために、手でさはつたからです。ガリレオがふしぎに思つたのは、そのランプの動き方でした。左から右へ、右から左へ、行つたり來たりするのにも、その一回一回の時間が、どうやら同じであるやうに思はれてなりません。

「何かで、驗してみる方法はなからうか。」

しばらく考へてゐたガリレオは、やがて、自分の脈を取つてみました。

やつぱりさうでした。ランプが一回動くのに、脈が二つ打つと、次の動きにも、脈は二つ打ちます。おどろいたこと

には、ランプの動きが、しだいに小さくなつて、のちにはかすかにゆれるだけですが、それでも一回の動きに、やはり脈は二つ打つといふぐあひでした。

ガリレオは、急いでうちへ歸りました。さうして、糸でおもりをつるして、同じやうなことを、何べんとなくやつてみました。

おもりを糸でつるして、それを動かすと、おもりは左右へ振ります。その糸を短くすれば、振り方が早く、長くすれば、振り方がおそくなります。しかし、糸の長さを、一メートルなら一メートルにきめておくと、おもりそのものは重くて



も軽くても、また、大きく動かしても小さく動かしても、振る時間は同じです。

十八歳の学生ガリレオはこのことを発見したのでした。それは、今から三百六十年ばかり昔のことです。

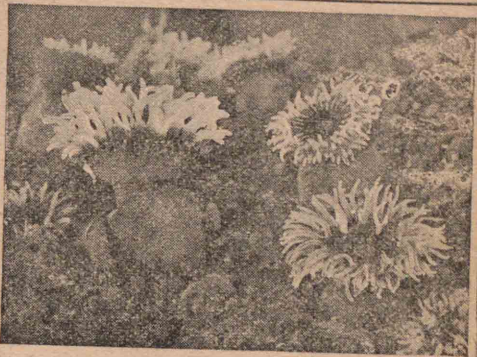
この発見があつてから、七十年餘り過ぎて、オランダのホイヘンスといふ人が、今までになく正確な時計を發明しました。それは、まつたくガリレオの、この発見を應用したものです。つまり、時計の機械に、振子を仕組んだもので、これが振り時計の始りです。

## 二十一 水族館

にいさんといつしよに、水族館へ行きました。入口のそばに池があつて、そこに、甲の長さが一メートルもある「うみがめ」が泳いでゐるのには、ちよつとびつくりしました。

中へはいつて、まづ目についたのは、室の窓ぎはに、いくつか並んでゐるガラスの箱でした。きれいな海の水が、こまかいあわをたてながら、どの箱にも注いであります。さうして、赤や、黄や、みどりの、何ともいへないほど美しいものが、その中にはいつてあました。ぼくは思はず、





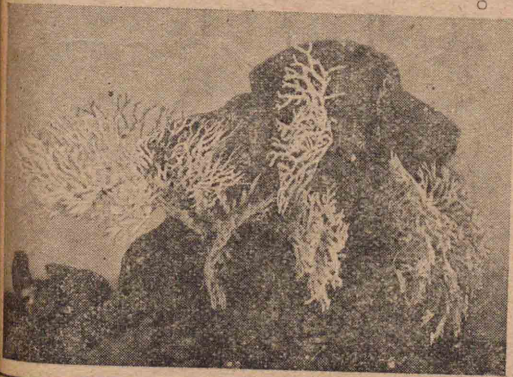
「きれいだなあ。何の花ですか、にいさん。」  
といひますと、

「ほんたうにきれいだね。でも、花ぢやない。みんな海にある動物だよ。」

と、にいさんがいひました。

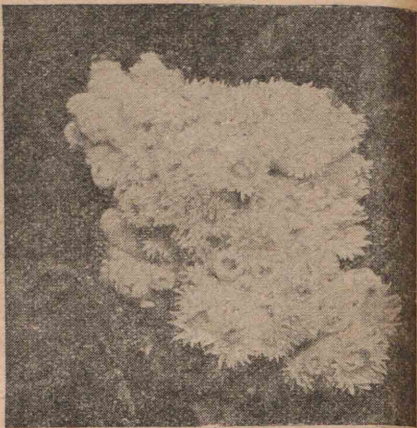
すきとほるやうなみどり色で、菊の花のやうに美しい形をしたのは、いそぎんちやくでありました。

ひのきの葉のやうな形で、黄色やえび茶色をしてゐるのは、いそばなでありました。



小さなきんせんくわが、むらがつて咲いてゐるやうなのは、いぼやぎでありました。

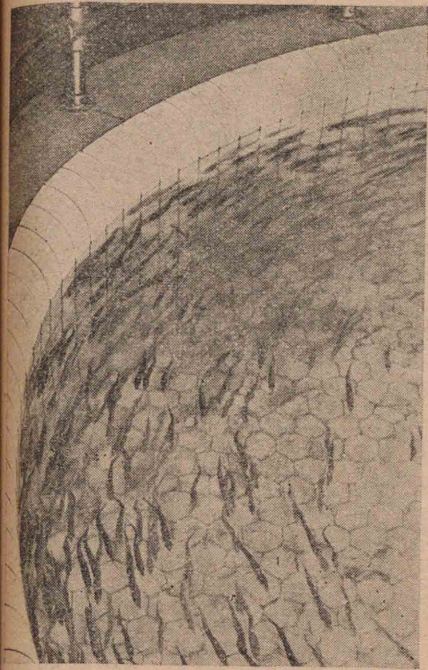
「くらげもゐました。すきとほつた寒天のやうなからだから、腕が何本も出てゐます。ときどき、からだをしばるやうにして、すいすいと浮きあがります。」



「ああしてからだをしばると、中の水が勢よく下へ出る。その反動で、くらげは運動するのだ。」  
と、にいさんがいひました。



この室の中央に、直径五メートルぐらゐの、まるい池があつて、中に、たくさん「いわし」が泳いでおりました。二千匹はあつたらうと、いさんがいひました。このたくさん「いわし」が、池のふちにそつて、みんな同じ方向へ泳いで行きます。一匹として、反対の方向へ進むものはありません。



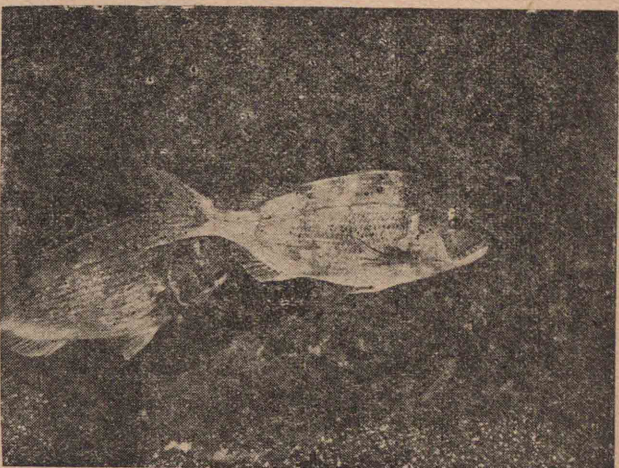
「みんな、同じ方へ向かつて泳いでおますね。」  
「さうだ。さうして、よくごらん。外側をまはつてゐるものも、内側をまはつて

ゐるものも、そろつて同時に進んでゐるだらう。つまり、外側のものは、大急ぎで進んでゐる、内側のものは、ゆっくり動いてゐる。それで、ちやうど内側も外側も、そろつて進めるのだ。」

次の室には、ガラスを張つた、大きな窓のやうなものが、順に並んでゐて、そのガラス越しに、いろいろの魚のあるのが見られました。「鯛」もゐました。「あぢ」もゐました。「かれひ」<sup>た、こ</sup>、そのほか名前を始めて聞く魚が、たくさんゐました。

「鯛は、なんといつても堂々としてゐます。五六センチ



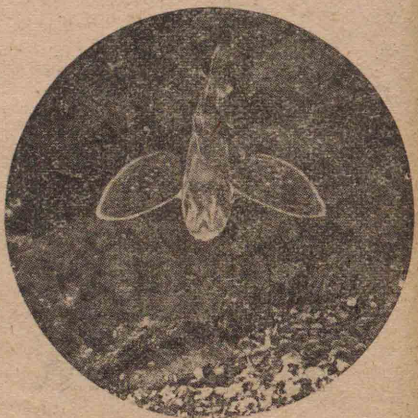


もあるのが、いういうと泳いで、ほかの魚などには、目もくれないといったふうです。光線のぐあひで、せなかのあたりが、點々と空色に光るのが、ほんたうにきれいだと思ひました。

「あぢは、水の中にあると、なかなか氣のきいた魚です。胸びれをすつと左下に張り、背びれしりびれを上下に張つて進むかつかうは、さかな屋の店先で見るとは、まるでちがつた感じですよ。軽快な戦闘機せんとうといったやうです。

それと似て、少し變つたのが「ほうぼう」

です。高いところから低いところへおりる時、その胸びれは扇あふぎのやうにひろがります。ちやうど、グライダーが空中をすべるやうに、手ぎはよく水を切つて、お



りて來ます。下へおりると、胸のところには足のやうなものがあつて、このこ歩くのにはおどろきました。

「かれひ」は、平たいからだをくねらせて泳ぎます。ほかの魚は、腹を下にし、背を上にして泳ぎますが、「かれひ」は、いつでもからだを横にしたまま、くねつて行きます。おもしろい



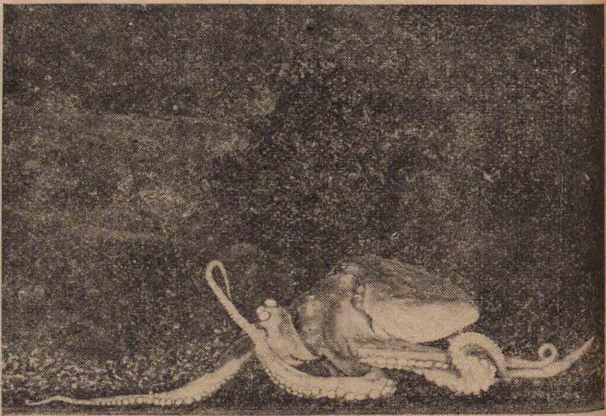
のは「かれひ」が砂の中にもぐつてゐるやうです。その平たいからだに、ちよつと砂をかぶると、上から見てもどこにあるのか見當がつきません。よくよく見ると、二つの目だけを砂の間から出して、きよろりきよろりと目だまを動かしながら、外を眺めてゐます。

「たこ」は變つた活動をします。岩や砂の上を歩く時は、八本の長い足を上手にくねらせ、頭を横に傾けて進みます。にいさんの説明によると、「たこ」といふものは妙なもので、あの頭といつてゐる部分が實は胴で、頭は足のつけ根のところにあるのださうです。

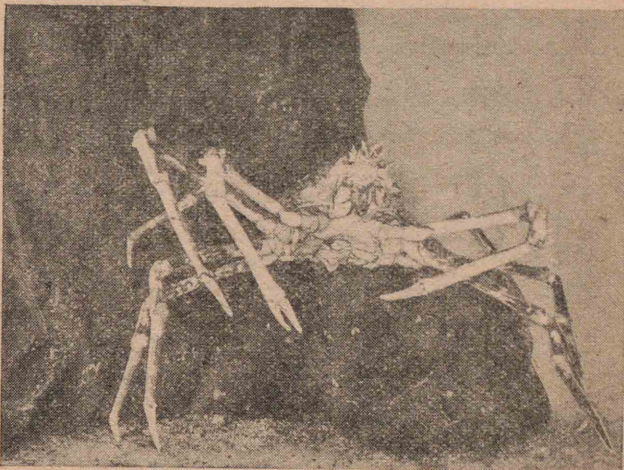
「だから、歩く時、ああいふふうに頭が傾いて、へんなかつかうに見えるが、あれは胴なのだから仕方がない。」

そのうちに、「たこ」が泳ぎ始めました。八本の足を一つにそろへ、胴を先頭に、まるで矢のやうに進みます。これが「いか」だともつとすばらしいさうです。

「たかあしがに」といふ大きなかにかがみました。左右の足をいつぱいに延したら、三メートルぐらゐはあるでせう。足の長い割合に、甲は小さいのですが、おもしろいのはその







口のところです。そこには、いろいろこみ入った道具がついてありますが、その上のところに、小さな觸角しよくかくがあつて、それが、ちやうど人形のかはいらしい。両手を思はせます。しかも、その手は、ピアノでもひくやうに、絶えず動いてゐます。

「かには、ピアノの先生ですね。」

と、ぼくがいふと、いさんは

「それよりも、ダイピストさ。」

と、いつたので、二人とも思はずふきだしてしまひました。

二十二 母の日

朝、目がさめたのは、五時過ぎであつた。ねえさんも起きるところであつた。ねえさんが、

「そうつと、静かにお仕事をませうね。一郎さんは、もう少ししたつてから起しませう。」

と、いつたので、私は、音のしないやうに起きて、着物を着かへた。こんなに早く起きることはめつたにないので、部屋の中が、いつもとは違つてゐるやうに思はれた。



ねえさんは、すぐに御飯をたき始めた。私は、飯臺を出してふいたり、みんなのお茶わんや、おはしや、おわんを並べたりした。それから一郎さんを起しに行くと、

「ねむいな。」

と大きな聲を出した。

「一郎さん、ゆうべのお約束よ。さ、静かに起きませうね。」

といふと、

「ああ、さうだった。」

といひながら、目をこすつて起きた。水で、じやぶじやぶ顔を洗つてから、

「ぼくは、庭はきをするのでしたね。」

と、一郎さんは、はうきを持つて、外へ出て行つた。

「ずあぶん寒いな。」

そんなことをいつて、庭をはき始めた。

みんなが、いつしよに働いたので、朝の支度はすぐできあがつた。

「もうぢき六時ね。今日はお祝ひの日ですから、何か花をかざりたいものですね。」

とねえさんがいつた。庭へ出て見ると、つばきが一りん咲きさうになつてゐた。それを折つて来ると、ねえさんが、



「きれいなつばきね。おかあさんのおすきな花だから、ちやうどいいでせう。」

といつて、一りんざしにさして、飯臺の上にかざつた。

そこへ、おかあさんが起きていらつしやつて、みんなのゐるのをごらんになつて、びつくりなさつた。

「まあ、けさはどうしたのです、こんなに早く起きて——それに、朝御飯の支度もちやんとできて。」

一郎さんが、

「今日は母の日ですから、おかあさんのお手傳ひをしたのです。」

といつたので、おかあさんもやつとおわかりになつた。

御飯の時、おかあさんが、おとうさんに、

「けさは、子どもたちが早く起きて、朝御飯の支度からお庭のさうぢまで、私の知らないうちに、すつかりしてくれましたよ。」

とおつしやると、

「それは、えらい。感心なことだ。」

とおほめになつた。

その夜、みんなが集つてゐる時、一郎さんが、お座敷の真中に立つて、



「ただ今から、母の日のお祝ひをいたします。初めに、ぼくが綴り方を讀みます。」  
 といつて、綴り方を讀んだ。題は、ぼくのおかあさんといふのであつた。

私は國語の「萬壽姫」を讀んだ。それからねえさんは「母」といふ唱歌を歌つた。一郎さんがまた立つて、

「おしまひに、おかあさんに記念品をさしあげます。」  
 といつたので、おかあさんは、「何をいただくのでせう。」とにこにこなさつた。



一郎さんが、一枚の繪をさしあげた。

「おやおや、おかあさんをかいてくれましたね。これはありがとうございます。一郎さん。」  
 次に、私が自分でこしらへた前掛をあげた。おかあさんは、それをちよつとお當てになつて、

「よく似あひますね。かは



いいぬひとりだこと。

とおつしやつた。最後にねえさんはひもであんだきれいな買物袋をさしあげた。

「これは、いいものをもらひました。毎日の買物に持つて行きますせう。」

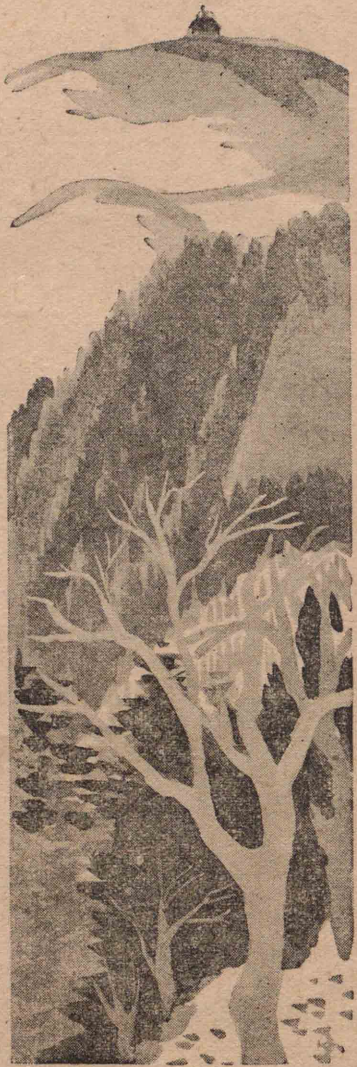
どうれしさうにおつしやつて、おとうさんにお見せになつた。

おとうさんは、

「これはこれは。今日はいい日だったね。」

とおかあさんにおつしやつた。

二十三 防空監視哨かんしせう



「あの山の上の人かげは。」

と、あなたがたは思ふでせう。それが、

いつも、ここに、

かうして立つてゐる私たちなのです。



雨の日、風の夜、

夏の太陽がやけつくやうなまひる時、

冬の風が骨をさしとほす朝——いつでも、

ここに、かうして立つてゐるのです。

冬がすんで、

また、明かるい春が來ました。

水のやうに澄んだ空を、

雲が、真綿を散らしたやうに飛んでゐます。

この大空の

はてのはてまで、私たちは

からだ中を目にし、からだ中を耳にして、

じつと、にらみ渡してゐるのです。

今にも、もし、空のどこかに、

かすかなうなり聲が聞え、

飛ぶ虫の群のやうに、飛行機が見えたら、

私たちの全神経が、いなづまのやうに動きます。



現れた時刻、方向、

敵か、みかたか。何型が何十機。

飛んでゐる高さは、方向は。

私はすぐ電話に向かつて、かう叫びます。

五番、春山監視哨

三十七分、北、

敵、中型、三十、

三千、南東。をはりつ。

二十四 早春の満洲

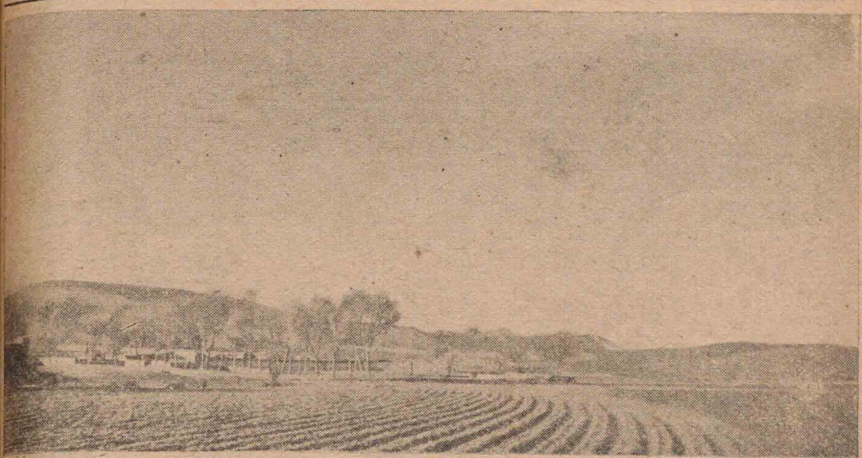
三月の聲を聞くと、満洲でも、春らしい日光がさして來ます。

あちらこちらの、スケート場の氷もとけて、もうすべることはできなくなります。

子どもたちは、また冬が來るまで、さやうなら。といふ氣持で、スケートの手入れをして、ちやんとしまつておきます。

スケート遊びと別れるのはいやですが、春の來ることは、子どもたちには、大きな喜びです。

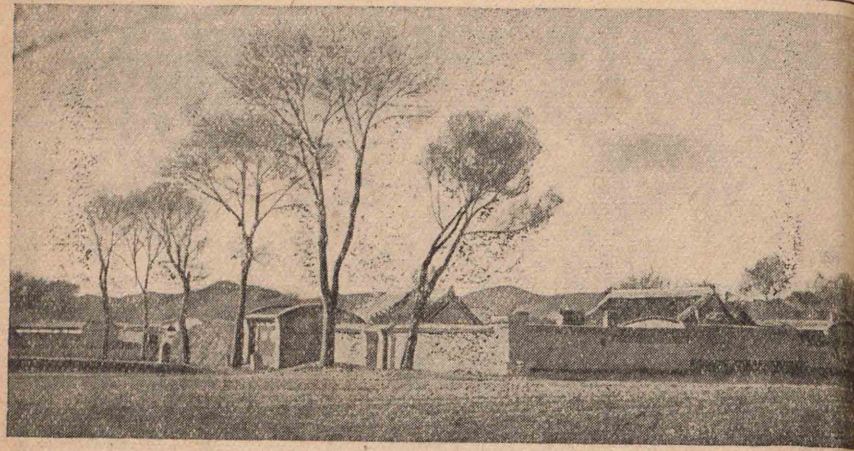




春が、ほんたうにやつて来るまでには、思ひがけないきびしい寒さが、二三日ぶり返したり、蒙古風が、ひと吹きふた吹き吹いたりしなければなりません。蒙古風といふのは、蒙古の奥から吹き起つて、大陸を吹き渡り、海を越えて、日本から太平洋まで吹いて行く大きな風です。黄色な砂ほこりを運んで来るので、これが吹く日は、天も地も暗くなつてしまひます。

冬中おせわになつてゐただんろや、ペチカや、オンドルなどともお別れです。どこの家でも、今までは石炭をたくので、ばいえんが空をよごしてゐました。それが、一度蒙古風が吹き通ると、すつかりよごれが拂はれてしまつて、きれいな青空が、光るやうに、地のはてまでひろがります。

寒さを防ぐために、しめてあつた二重窓が開かれます。窓といふ窓が、す





つかり開かれるので、部屋の中のごつた空気が出て行つて、きれいな空気が流れるやうにはいつて来ます。窓のそばに鳥かごがつるし出され、鉢植の草花が持ち出され、子どもたちの顔が並びます。明かるい日光が、小鳥の羽に、草花の葉に、子どもものほほに降り注ぎます。みんなは、ただうれしいのです。長い間、閉ぢ込められてゐた人たちにとつては、春は、うれしいだけではありません、ありがたいのです。いちばん早く花をつけるのは、れんげうです。れんげうの花は、真黄色で、枝一面につきまます。まだ葉が出ないうちに咲くのですから、花の色で、その邊が、ぱつと明かるくなる

ほどです。れんげうの咲いたそばに、子どもがよく集つて来ます。

満人が、外に鳥かごを持ち出して来て、鳥を鳴かせ始めます。鳥は満洲ひばりです。久しぶ



りに廣い空を見、澄んだ空気を吸つて、満洲ひばりは、さもうれしさうにさへづります。満人は、その聲に聞きとれて、そばにしやがんだり、腰掛けたりして、いつまでも聞いてゐます。



やなぎの木がほかの木よりも早く目をさまします。みどりがかつたこずゑを延してせいのびをし、小さな芽をつけ始めます。遠くから、やなぎの並木を見ると、うすみどりにかすんで見えます。

このころ、夕やけの空を、日が落ちて行くのは、みごとなものです。その大きなこと、何といつたらいいでせうか、ふたかかへもありさうな大きな夕日です。見渡すかぎり平な地平線に、大きな夕日が赤々とはいつて行きます。

かうして、一日一日と、のどかな春になつて行くとともに、春のいそがしい仕事が始つて行きます。

雁がんの群が、シベリヤの野山に卵を生まうとして、さかんに空を渡つて行きます。日本から来て、玄界げんかいなだを越え、満洲からもつともつと北をめざして、飛んで行きます。

かささぎは、巢すを作らうとして、あちらこちら飛びまはります。かささぎは、毎年新しい巢を作つて、ひな鳥を育てるのです。

農夫たちは、広い、広い畠を耕し始めます。すつかり耕した畠に、大豆や、かうりやんなどの種をまくころは、もう満洲の春が深くなつてゐます。



影	談	惜	續	屬	縣	試	難	候	順	與	軒
(5)	(7)	(7)	(7)	(8)	(8)	(8)	(9)	(9)	(9)	(10)	(11)
斜	肥	料	箇	株	熱	將	込	理	澄	佐	觀
(15)	(16)	(16)	(16)	(16)	(18)	(19)	(20)	(23)	(23)	(25)	(26)
召	導	騎	源	怠	皆	舞	納	情	胴	翼	垂
(27)	(27)	(29)	(31)	(32)	(33)	(34)	(34)	(37)	(47)	(47)	(47)
確	設	製	係	折	接	在	婦	帥	沉	靴	備
(48)	(48)	(49)	(49)	(50)	(56)	(58)	(58)	(61)	(61)	(62)	(64)
扱	定	群	屈	務	果	閉	杖	制	距	荒	貫
(64)	(66)	(66)	(66)	(67)	(67)	(73)	(77)	(83)	(85)	(86)	(87)
阪	各	灣	堀	産	達	劇	復	興	有	塔	級
(88)	(89)	(89)	(89)	(90)	(90)	(92)	(92)	(92)	(92)	(93)	(94)
免	厚	鋼	釜	冷	卒	職	路	轉	要	驗	脈
(96)	(96)	(96)	(97)	(99)	(100)	(100)	(101)	(102)	(103)	(106)	(106)
輕	應	反	徑	違	綴	題	型	邊	農		
(108)	(108)	(111)	(112)	(119)	(124)	(124)	(130)	(134)	(137)		

昭和十七年七月六日  
 昭和十七年八月八日  
 昭和十七年七月八日  
 昭和十七年七月六日  
 印刷發行  
 翻刻發行  
 翻刻發行

初等科國語四  
 定價金貳拾錢

著作權所有  
 陸軍省  
 海軍省  
 協濟  
 文部省

昭和十七年七月九日  
 文部省檢査日



東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
 東京書籍株式會社  
 代表者 井上源之丞  
 東京市王子區堀船町二丁目八百五十七番地  
 東京書籍株式會社工場

發行所  
 東京書籍株式會社



